

寝屋川市文化財資料

片町線複線化工事に伴なう

国 守 遺 跡

調査概要報告

1979・3

寝屋川市教育委員会

目 次

序 文	
例 言	
I 遺跡の位置と環境.....	2
II 調査日誌.....	5
III 調査概要	
1. 予備調査.....	7
2. 本 調 査.....	10
IV 出土遺物.....	16
出土遺物観察表.....	20
V まとめにかえて.....	29
図 版	

挿図目次

第1図	周辺の遺跡	2
第2図	調査地の付近図	7
第3図	トレンチ位置図	7
第4図	第2トレンチ断面図	8
第5図	第3トレンチ断面図	8
第6図	第4トレンチ断面図	9
第7図	第8トレンチ断面図	9
第8図	第5地区・平面図及び北断面図	11
第9図	井戸遺構実測図	12
第10図	石群遺構実測図	13
第11図	第8～10地区 平面図及び断面図	14
第12図	第11地区平面図及び断面図	15

図版目次

図版1	調査前の状況・第1地区調査状況	32
図版2	第5地区断面・第11地区旧表土及び野ツボ	33
図版3	第5地区井戸遺構・井戸遺構の井筒	34
図版4	第5地区井筒の板木・井戸遺構の掘り屑	35
図版5	第6・7地区 石組遺構	36
図版6	第8～10地区 ピット群	37
図版7	須恵器	38
図版8	須恵器・土師器・土師質土器	39
図版9	土師器・埴輪・石製品	40
図版10	陶磁器・瓦器・火舎・瓦	41
図版11	鉢・擂鉢類	42
図版12	土釜類(羽釜・茶釜形土器)	43
図版13	土釜類(羽釜・足釜の脚)	44
図版14	須恵器・埴輪実測図	45
図版15	弥生土器・土師器・土師質土器・石製品実測図	46
図版16	瓦器・陶磁器・火舎・瓦実測図	47
図版17	土釜・鉢・擂鉢実測図	48
図版18	土釜実測図	49

序 文

東は生駒山地、西は淀川に接して広がる本市は、古代においては、その南部に広大な河内湖をひかえてはやくより先人たちの生活活動の場としての歴史的環境をそなえていました。当然のこととして市域内には、多くの埋蔵文化財包蔵地が周知されています。このような文化財を後世に伝えていくことは、現代に生きる我々の責務であり、これらを保存活用することは、地域の歴史的環境を解明するうえで極めて重要であります。そのためには文化財について調査、保護体制を強化するとともに、文化財愛護の精神の啓発を積極的に推進してまいります。

この「国守遺跡調査概要報告書」は日本国有鉄道の片町線複線化工事にともない現状保存が困難になったので、やむおえず昭和51年6月から8月までの間に記録保存の措置を講じ、調査結果の概要を当教育委員会でとりまとめたものであります。

なお、調査及び調査報告書の作成に関し、ご協力をいただきました各位に心からお礼を申し上げますとともに、今後とも本市の文化財保護に一層のお力ぞえを賜りますようお願い申し上げます。

昭和 54 年 3 月

寝屋川市教育委員会
教育長 坂中 僕

例　　言

1. 本書は昭和51年に、寝屋川市国守町において日本国有鉄道片町線の複線化工事に伴なう国守遺跡の調査概要報告書である。
2. 調査は、寝屋川市教育委員会が枚方市文化財研究調査会に依頼し、昭和51年5月に予備調査、同年6月・7月に本調査を実施した。
3. 調査は、宇治田和生（枚方市文化財研究調査会）が担当し、大阪経済法科大学考古学研究会・谷川博史・原田昌則・黒飛誠巳・岩本俊宏・平山裕元・大西理らの参加協力を得た。なお、調査にあたっては、日本国有鉄道大阪工事局・株式会社森組の協力と援助を受けた。
4. 遺物整理・図面作成は、宇治田・西田敏秀・横藤田晶子（関西大学）が行ない、福田薰（大阪経済法科大学）の協力を受け、執筆は宇治田があたった。
5. 遺物写真は約3分の1の縮尺にできるだけ統一し、番号は実測図と同一番号を使用した。
6. 発掘調査の進行・報告書作成などについて、寝屋川高等学校教諭・瀬川芳則氏、四條畷市教育委員会・野島 稔氏、枚方市文化財研究調査会・三宅俊隆・柳本照男・片岡 修・桑原武志各氏に指導・助言を得たとともに、多くの人々の協力を受けた。ここに記して謝意を表わす。



第1図 周辺の遺跡（明治18年）

I 遺跡の位置と環境

国守遺跡は寝屋川市の南端、四條畷市との市境に位置する国守町の東に所在している。生駒山地の西側に派生した寝屋川東部丘陵の南端、標高30~40mの比較的ゆるやかな傾斜地に立地している。

遺跡地の北側を流れる讚良川は、四條畷市清滝の山中に源を発して東西に流れしており、両岸に段丘を形成している。国守遺跡はこの段丘上に営まれた複合遺跡であり、分布調査では、府道・枚方富田林泉佐野線沿いに、広範囲にわたるようである。

歴史的環境を概観してみると、この付近は、いわゆる河内湾・河内湖の東岸にある。片町線忍ヶ丘駅より西約500mにある岡山新池の北側を流れる讚良川付近は、旧石器時代と縄文時代後期・晚期の讚良川遺跡、忍ヶ丘駅の南には有舌尖頭器・

縄文時代前期～後期の土器や石器が出土した南山下遺跡があり、寝屋川市域においても太秦・打上などでは、旧石器と考えられている石器が採集されている。

前述の縄文時代の遺跡の他、縄文時代の中后期の遺跡として星出厄遺跡があり、後期の遺物が採集された小路遺跡などがある。

弥生時代には前期の遺跡は知られていないが、北西へ約1000mのところには、弥生時代中期の太秦遺跡があり、後期になると西約1000mに小路遺跡が出現している他、弥生時代後期の遺跡として寂屋遺跡が知られるのみである。

古墳時代にはいると、前期では四條畷市忍ヶ岡古墳があるが、集落址は現時点では知られていない。中期の集落遺跡や遺物が出土した遺跡が、四條畷市域の片町線沿いに多く集中し、忍ヶ丘駅前遺跡・南山下遺跡・奈良井遺跡・岡山南遺跡などがある。しかし、中期古墳には明確なものは少なく、四條畷市墓ノ堂古墳のみであろう。後期古墳は、寝屋古墳・トノ山古墳・太秦古墳群・打上神社古墳群などがあり、『河内名所図会』に「八十塚」と記載されており、現存するものは少なくなっているが、群集墳の性格をもつと思われる。終末期古墳としては、横口式石槨をもつ石ノ宝殿古墳がある。

歴史時代になると、讚良川の対岸に打上遺跡があり、奈良時代の十数棟の掘立柱の建物跡などが発掘されている他、遺物の出土は知られるが遺構が検出された例は少ない。しかし、古代寺院は、寝屋川市高宮廃寺・太秦廃寺・高柳廃寺、四條畷市讚良廃寺・正法寺などがあり、一郷一寺を思わせるほど寺院の数が多く存在しているのは、この地域の特色であろうか。

中世の遺跡としては、分布調査において遺物の散布地は、寂屋、国守町付近に点在しており、国守西遺跡・寂屋遺跡・寂屋東遺跡・寂屋南遺跡などがある。四條畷市教育委員会の片町線複線化に伴なう発掘調査においても、遺構の検出や遺物の出土が認められている。ちょうど東高野街道沿いになり、この付近～帶に集落などの生活の場が営まれていたと思われ、国守遺跡も東高野街道の南側に立地しており、これらの中世遺跡と共に発達していた村落と考えられる。

参考文献

- 寝屋川市役所 「寝屋川市誌」 1966年
- 寝屋川市教育委員会 「寝屋川市の文化財」第Ⅰ集 1979年
- 四條畷市役所 「四條畷市史」第1巻 1972年
- 四條畷市教育委員会 「四條畷の古代史発掘」 1976年

II 調査日誌

予備調査

昭和51年5月7日 試掘調査開始、トレンチにより遺構の有無を確認する

5月8日 第4トレンチにおいて包含層並びに遺構を検出、第5トレンチより遺物出土

5月9日 第8トレンチより包含層を検出

5月10日 第1～第11トレンチを設定し、予備調査終了



本調査

昭和51年6月18日 本調査開始 5m間隔に地区割を行う。第1地区より遺物出土

6月19日 第1地区・遺構検出されず、午後より降雨



6月21日 第2・3地区・掘り下げ終了。表土直下地山になり遺構・遺物検出されず。第4・5地区掘り下げ開始

6月22日 第6・7地区 掘り下げ開始

6月23日 第5地区において井戸状遺構を検出する

6月24・25日 雨の為、遺物整理作業

6月28日 井戸遺構より木板による井筒を検出、及び北東部に石の散乱を検出。6・7地区 搬乱層掘り下げ



- 6月29日 井戸造構内、北東半分掘り下げる。6・7地区 旧表土除去
- 6月30日 井戸造構内掘り下げ終了、6・7地区 旧表土・床土掘り下げ
- 7月1日 6・7地区、石敷造構を検出。線路に影響があるため、実測後埋め戻す。
- 7月2日 排土の盛り場を設定するためにベルトコンベアー移動
- 7月3日 井戸造構断面実測、11・12地区盛土除去
- 7月5日 井戸造構、掘り肩検出作業、11・12地区、盛土除去
- 7月6日 雨の為、遺物整理
- 7月7日 井戸造構、掘り肩部掘り下げ、8・9・10地区 盛土除去
- 7月8日 井戸造構、掘り肩部掘り下げ終了、8・9地区 耕土除去
- 7月9日 井戸造構 実測後埋め戻す。9・10地区耕土除去
- 7月12日 5地区 包含層掘り下げ、11・12地区 盛土除去
- 7月13日 11地区 野ツボを検出 12地区 溝状造構検出
- 7月14日 降雨の為 防災対策
- 7月15日 11・12地区 断面・平面実測、12地区、溝状造構掘り下げ一造構にならず
- 7月16日 11地区、埋め戻し、8~10地区、灰褐色砂質土掘り下げ
- 7月17日 12地区、埋め戻し、8~10地区遺構検出作業
- 7月19~22日 8~10地区 遺構掘り下げ
- 7月22・23日 8~10地区 遺構実測
- 7月24日 8~10地区 埋め戻し作業終了

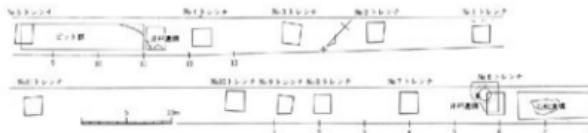
III 調査概要

1. 予備調査

調査地が国鉄片町線と住宅にはさまれた細長い地区であり、最も巾の広いところで4mしかなく、長さは130mである。現状の踏査においても、線路の建設や住宅地の造成時に破壊されていると思われる所以、本調査の範囲を定めるために、2m×2mのトレンチを11ヶ所に設定した。



第2図 調査地の付近図



第1トレンチ

第3図 トレンチ位置図

盛土が約180cmあり、旧表土に達する。旧表土は水田の耕土と考えられるが、厚さ約20cmである。それより下層は、列車が通過する毎に、土がくずれてくる状況であり、線路にも影響を与えるおそれがあるため、調査を中止せざるを得なかった。

盛土内から須恵器・土師器等の破片がみつかっている。

第2トレンチ（第2図）

盛土は約150cmの厚さがあり、北西部では灰青色に変色している。盛土中からは近・現代の遺物が中心であるが、瓦器塊の破片、土師器・須恵質土器の破片なども出土している。

旧表土は水田の耕土であり、約10cmの厚さを測る。耕土の南端において、一本の杭が打ち込まれていた。第3層淡褐色砂層が約10cmあり、地山に達する。

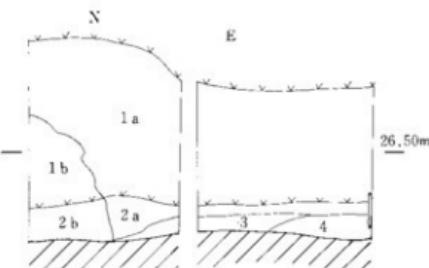
淡褐色砂層からは、瓦器塊・土釜等の中世遺物の破片が出土したが、染付磁器の破片も含まれていた。遺構は認めることはできなかった。

第3トレンチ(第3図)

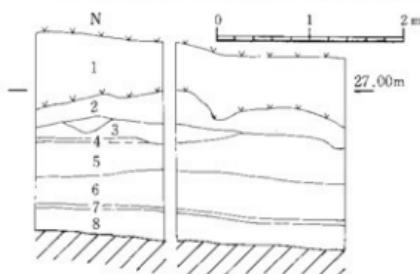
盛土は50~80cmの厚さがあり、旧表土になる。旧表土は東から西へ傾斜している。

第3層と第5層は灰褐色砂質土層であり、色調・土質共に類似しているが、層間に約5cmの厚さで黄褐色粘質土層が入っているので区別した。しかし、他の状況から考えると、あまり時期的差はないようである。

第6層灰色砂質土・第8層・暗青灰色粘質土の堆積があり、その間に巾約5cmの黄色粘質土層がある。両層から中世遺物が出土したが、遺構を認めることができなかった。地山は青灰色砂質土になっており、水等の影響により変化したものであろう。第6層・第8層の状況から考えて中世の水田跡の可能性もあったが、調査には危険が伴なうため本調査からは除外することになった。



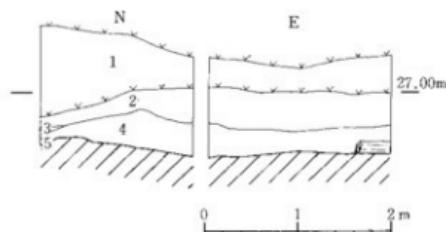
第4図 第2トレンチ断面図
1a 撥乱層 1b 灰青色擾乱層 2a 淡褐色砂質土層
2b 喧褐色砂質土層 3. 淡褐色砂層 4. 淡褐色砂質土層



第5図 第3トレンチ断面図
1. 撥乱層 2. 伝書土 3. 淡褐色砂質土層
4. 黄褐色粘質土層 5. 灰褐色砂質土層 6. 灰色砂質土層
7. 黄色粘質土層 8. 暗青灰色粘質土層

第4トレンチ（第4図）

盛土下の旧表土は、やや東から西へ傾斜をもち、西側断面では平坦になって、水田の耕土の状況を呈している。第4層灰褐色砂質土からは中世遺物が出土するが、石炭も含まれている。東断面の南端に木が丸太のまま置かれ、土留めの役目をしていたと思われる。



第6図 第4トレンチ断面図

1. 混乱層 2. 旧表土 3. 灰褐色粘質土層
4. 灰褐色砂質土層 5. 淡灰色砂質土

第5・第6トレンチ

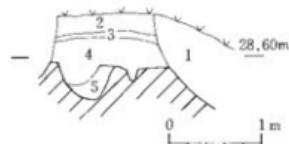
両トレンチからは、褐色砂質土層・灰褐色砂質土層を確認した。両層とも包含層と思われる所以本調査が必要と考え、予備調査はその時点で終了した。

第7・第9・第10・第11トレンチ

削平がはげしく、表土を除去すれば地山になる。第8トレンチよりも100cmも低くなっている。付近の状況を考えると、遺構面は後世の削平により破壊されてしまったと考えられる。

第8トレンチ（第7図）

周囲より100cm程高くなっていた場所であり、断面観察によって褐色砂質土層（包含層）を検出したので、隣接するトレンチに認められた後世の削平は少ないようであり、本調査が必要と考え、その時点で予備調査は終了した。



第7図 第8トレンチ断面図

1. 混乱層 2. 黄褐色粘質土層
3. 茶褐色粘質土層
4. 褐色砂質土層 5. 淡褐色砂質土

以上の予備調査の結果、第10・第11トレント間は後世の削平がはげしく、遺構の残存は考えられないので、本調査範囲から除外した。

第1～第4トレントにおいては、遺物の出土があり、水田耕作などによって削平された部分もあるが、遺構の残存も考えられた。しかし、旧表土（耕土）面でも現地表から150cm以上の深さがあり、調査地が線路と住宅にはさまれた地区であるので、予備調査中においても列車の通過時には土が落ちてくる状況であった。調査によって既線路や住宅に影響を与える可能性が強く、調査時においても危険が伴なう状態だったので、本調査からは除外することにした。

2. 本 調 査

予備調査の結果、本調査の必要及び可能な範囲は幅約3m・長さ60mであった。その範囲は5mの距離で地区割りを行ない、地区名はその北方杭をその呼称とした。

第1・第2地区（第7図）

第8トレントの断面観察において包含層と思われる上層を検出した地区である。包含層が確認される旧地形は、第9トレントとの間で幅約1m・長さ3mの範囲であった。四方は鉄道や道路によって削平されており、この範囲のみに旧地形が残っていたので本調査を実施した。

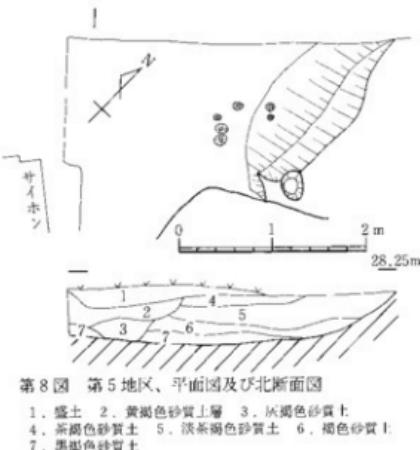
断面で観察したピット状の上層は、残存部分は少なく、どのような形状のピットであったかは不明であり、他に遺構が検出することはできず、遺構の性格を把握できるような状態ではなかった。しかし、包含層は大きく2層に分けられる。瓦器塊の破片を含む茶褐色砂質土層と土師器や須恵器を中心とする褐色砂質土層があり、褐色砂質土層からは弥生土器（8・15—17）や砥石（9・15—35）なども出土している。

第3・第4地区

第1・第2地区より1m以上も低くなってしまい、旧地形は削平されていることは予想されたが、遺構の残存も考えられたので、本調査の対象としたが、包含層や遺構は検出されず、遺物の出土も認められなかった。

第5地区（第8図）

地図の中央付近より北東は、第3・第4地区と同様に後世の削平がおこなわれており、遺構・遺物は確認できなかった。しかし、地山面が南西に傾斜しており、旧地形を残していたので包含層を検出することができた。しかし、範囲はせまく、農業用水用のサイポンや井戸遺構などに破壊されており、幅170cm、長さ約300cmの範囲であった。



第8図 第5地区、平面図及び北断面図
 1. 盛土 2. 黄褐色砂質土層 3. 灰褐色砂質土
 4. 茶褐色砂質土 5. 淡茶褐色砂質土 6. 褐色砂質土
 7. 黑褐色砂質土

包含層は3層に大別することができ、茶褐色砂質土・淡茶褐色砂質土層からは瓦器の破片が出土しており、淡茶褐色砂質土層からは須恵器・蓋環（7・14-7）、褐色砂質土層からは須恵器・杯（7・14-1・2・6・8）、黒褐色砂質土層からは線（7・14-20）・器台（8・14-27）などが出土した。その他埴輪片・滑石製双孔円板（9・15-33・34）などが出土した。

遺構としては、1個のピットと小ピット群を検出したが、狭い範囲内であったためそれ以上の追求は不可能であった。

井戸遺構（第9図）

井戸遺構は直径約110cmのほぼ円形を呈し、木製の井筒を有する形態であった。深さは上部が削平されている可能性があるが、現状では160cmを測る。井戸内の土は灰褐色砂質土系の土層が埋まっていた。堆積状況から考えて、自然堆積ではなく、井戸を放棄した時に埋めたものと考えられる。

井筒は幅10~20cmの板木を周囲に立てられているが、長さは残存している一番長い板木で約60cmをはかるが、その上部にも板があったと思われる。つまり延長上に

は、板木の厚さと同じ厚さで、縦に灰色粘土がめぐっており、井筒が伸びていたことを証明している。

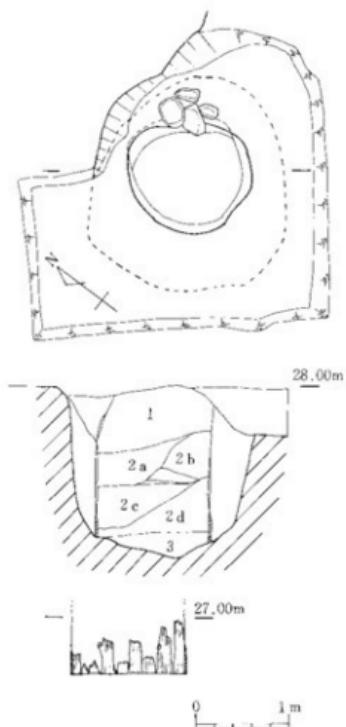
井戸内の底は凹んだ状態で、灰黒色粘土層が堆積していた。凹みは板木の最下部より低く凹んでいることから、地山が砂層であるので、使用されている時期に凹んだのである。灰黒色粘土層内から施釉陶器の蓋（10・16-10）が出土しており、井戸の使用時期は江戸時代中頃以降と思われる。

掘り肩の径は約2mを測り、井筒を入れながら埋めたようである。井戸端には花崗岩の石を4個検出したが、掘り肩の内側であり、この花崗岩が埋めた時に一緒に入れられたのか、それとも井戸端の施設として設られたものは、上部が削平されたか否かは不明であるため、明確にすることはできなかった。

第6・第7地区（第10図）

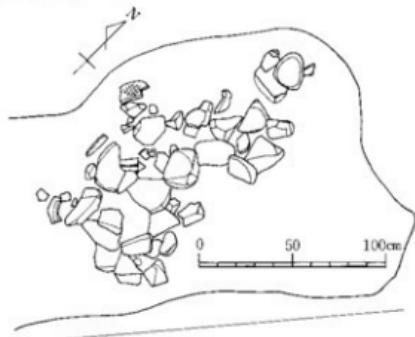
第6～第11地区ではほぼ同一層を呈しているが、第5地区よりは約50cm低くなっている。第1層は新しい盛土であり、第2層の旧表土は水田の耕土であり、第3層は床土である。その下層は淡灰褐色砂質土層と灰褐色砂質土層の2層があり、両層とも中世遺物を含む包含層である。

遺構は不定形の凹みが南北にのびており、その凹みの中には石が多量に検出した。この凹みはやや南に傾斜を持っているように思われるが、線路側の調査範囲外になっ



第9図 井戸遺構実測図（破線は掘り肩）

1. 灰色砂質土層 2(a～d)、灰褐色砂質土層
3. 灰黒色粘土層



第10図 石群遺構実測図

てしまうので確認することは不可能であった。凹みの中の石は花崗岩が多く、大きさは人頭位からこぶし位まで千差万別である。これらの石が人為的に規則性をもつて置かれたような状況ではなかった。

石群の中には、遺物も多く含まれており、それらの遺物は、土釜類(図版13・18)や陶質擂鉢(11・17-6・7)、須恵質練鉢(11・17-2・3)、瓦器碗(10・16-11)磁器(10

(10・16-2・4・5)などの中世日常雑器や巴文軒丸瓦(10・16-18)が出土している。

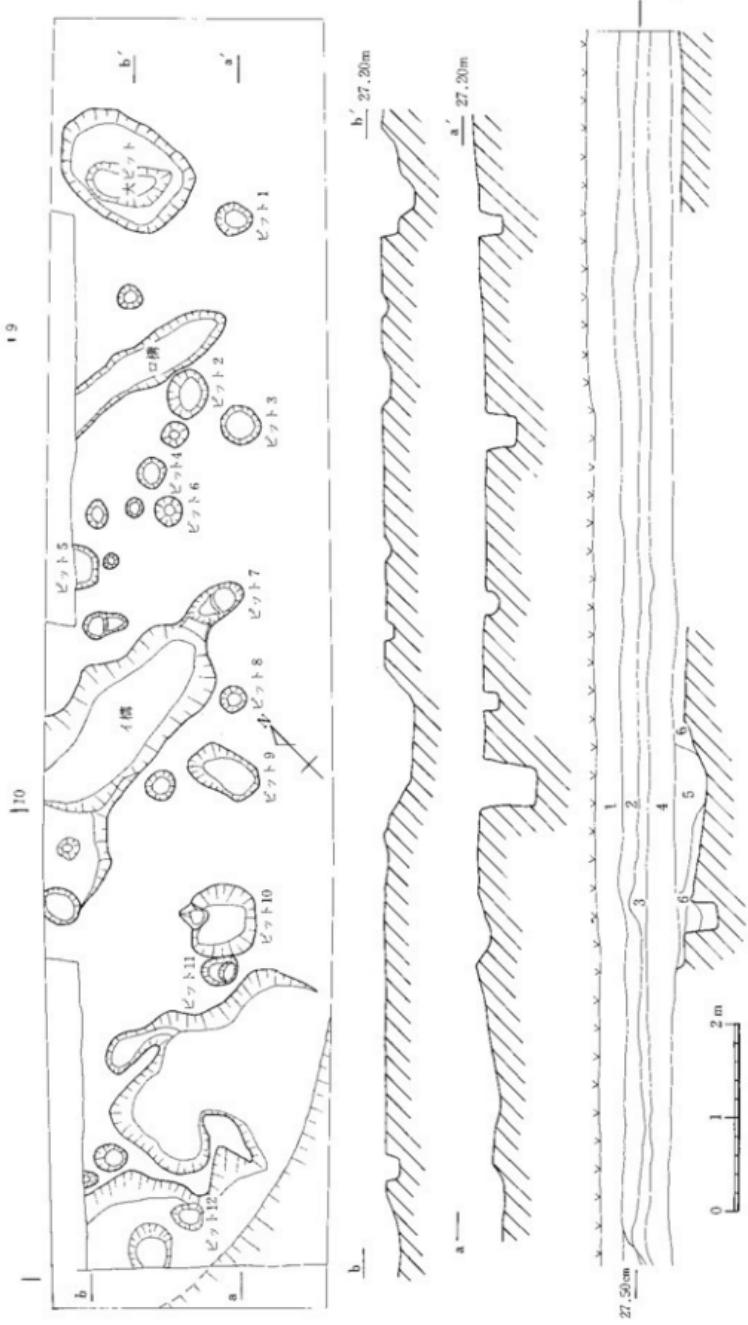
これらの遺物はすべてこわれており、日常雑器類が捨てられてたものもあるかもしれないが、今回の狭い範囲内での調査では、これらの性格を明確にすることは不可能であった。隣接する第8～第10地区で検出したピットや溝などの遺構が検出されなかつたのは、この地区的地山は砂層であり、両側の地区的地山が粘質を呈しているので、古くは流路になっていた可能性もある。

第8～第10地区（第11図）

層序は第6・7地区と同一層で平行な層をなし、この地区においてはピットや溝状遺構などが検出された。前述した石群遺構からは約5mの距離があり、その間に遺構らしいものを検出することはできなかつた。遺構が検出された地山は粘質を呈するが、その間は6・7地区と同様に砂層である。

遺構は2本の溝状遺構とピット群からなり、イ溝は幅20cmで深さは5～10cmの浅い溝状を呈し、ロ溝はイ溝から150cm離れており、幅100cm・深さ20～30cmを測る。出土遺物は両溝とも土師質小皿・瓦質土釜の破片がある。

両溝とも地区的3分の2の付近からはじまり、西へ走って調査範囲外に伸びている。

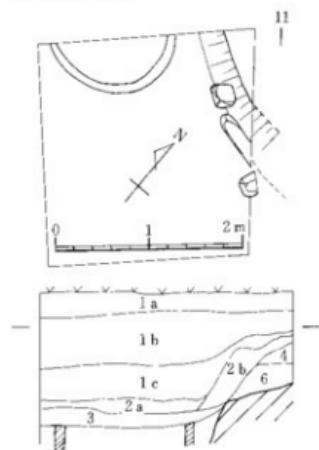


第11図 第8～10地区 平面図及び断面図
1. 滑乱層 2. 固結土 3. 黄褐色粘土質土(底土)
4. 淡灰褐色砂質土質 5. 黑色砂質土質 6. 黑褐色砂質土質

溝の東端付近から線路側にはピットなどの遺構も検出することはできなかった。

ピット群は直径20~40cmの大きさで、約20個を検出したが、ピット相互の関連を把握するにはいたらなかったが、東ではほぼ等間隔に一列に並び、西側にはなんらかの建造物があったと思われる。出土遺物は土師質小皿・瓦器碗・青磁碗などの破片などがあり、時期的には中世の同一時期に存在したものであろう。

大ピットは丸味をもった南北に長い長方形を呈し、大きさは長辺75cm、短辺50cmを測る。出土遺物は多く、土師質小皿（8・15~4・7・10・11）や瓦質土釜・瓦器碗の破片がある。



第12図 第11地区平面図及び断面図

1. 機械層 2. 直表土(耕土) 3. 晴灰青色砂質土(未上) 4. 晴灰褐色砂質土層 6. 褐褐色砂質土層

本調査において中世遺構を検出したが、後世の破壊もはげしく残存状況は極めて悪く、遺構を垣間見たにすぎない。しかし遺構の状況から考へるに第8~第10地区において検出したピット群から建造物があったことが想像され、西へ遺構面が広がっていると思われる。

第11地区（第12図）

この地区は第10地区よりも地山面が、約60cm低くなっている。中世遺構を検出することはできなかった。10地区の南西端より傾斜をもって落ち込んでおり、断面では包含層は旧表土によって切られていることから後世に段状に水田が造成されたようである。旧水田下に円形のシックイによる井戸があり、いわゆる野ツボと思われるが、水田面が2・3時期があると思われ、上部は削平されている。

本調査において中世遺構を検出したが、調査範囲の幅3mと限られているため、遺

構の性格や相互関係を把握することは不可能であり、後世の破壊もはげしく残存状況は極めて悪く、遺構を垣間見たにすぎない。しかし遺構の状況から考へるに第8~第10地区において検出したピット群から建造物があったことが想像され、西へ遺構面が広がっていると思われる。

N 出 土 遺 物

弥生土器 (図版 8・15)

弥生土器と思われる破片は 2・3 点出土しているが、器形が判明するのは 1 点のみである。壺の口縁部 (17) の胎土は雲母を多く含み、色調は茶褐色を呈するいわゆる河内の土器と呼ばれる類である。しかし小片であるので詳細を述べることはできないが、口縁は下に折れ曲がり、端部には円形浮文を有している。

高坏 (16) はふくらみをもつ脚部であるが他の部分は欠損しており、明確にしがたいが、土師器の範疇に含まれるものであろう。

須恵器 (図版 7・8・14)

須恵器の器形は蓋坏・腺・壺・甕・器台などがある。蓋坏は大型のものと小型のものとがあり、大型のもの (1・2) は比較的古い形態をもっている。蓋部において小型のものはかえりをもたない形態のもの (6・7) とかえりをもつ (3・4・5) に分けられ、(4) は宝珠形のつまみをもつと思われる。身部においても種々の形態があり、(8) は蓋受けのかえりをもち、(15) は高台を有する。

腺 (20) は肩部の張りはすくなく、ヘラ描きの沈線の装飾を有し、2 条のヘラ描沈線がめぐらされている。壺としては長頸壺の口縁部 (19) と短頸壺 (21) がある。短頸壺は球形にちかい胴部をもつ。甕は内面に同心円タタキ調整を施すが、その上からナデ調整を施すもの (23) と施さないもの (24) とがある。口縁部はやや外反すると思われる (23) と直立すると思われる (24) がある。

その他、鉢 (18) は線釉が施され、器台 (27・28) は波状文も有し、(28) は 3 段の透しをもっている。

土師器・土師質土器 (図版 8・9・15)

土師器・土師質土器は、小皿・大皿・塊・壺・甕・瓶などがある。小皿は凹底 (1・7・10・) と丸底 (2) の他、大部分は平底を呈している。口縁部内側に沈線を

もつもの（9）もある。大皿のうち最大径のもの（15）は21.6cmを測る。（14）は口縁部への立上がりは少なく器高は低い。境は口縁部が外反する（20・21・24）、丸味をもつ（19）とやや端部が内傾する（22）に分けられ、（20）は内面に暗文を有する。

無頸壺（25）は丸底を呈し、形状の胴部からやや内傾する短かい口縁をもつ。壺口縁部（26）はやや外反する口縁を有する。甕（27）は弯曲した胴部のまま口縁にいたり、口縁部を折り曲げて片口にしている。

その他の土師器・土師質土器の把手付土器の把手があり、断面が扁平なもの（29・31）と円形のもの（30）がある。

磁器・施釉陶器（図版10・16）

白磁碗の口縁部（1）はやや外反し、青磁碗の口縁部（2）は体部の弯曲がそのまま口縁にいたる。青磁碗の底部（3・4・5）も出土している。染付きを有する伊万里系の碗（9）もある。施釉陶器としては碗の底部（8）と蓋（10）などがある。

瓦器塊（図版10・16）

瓦器塊の破片は十点余の個体があると思われるが、実測可能なものは2個体（11・12）であった。口縁内面に沈線を有する（11）と段を有する（12）で、両方とも内面の暗文は比較的密であり、外面にも暗文を有している。（12）の高台はしっかりしている。その他、暗文が粗いものもある。

火舎（図版10・16）

火舎はすべて瓦質であり、口縁部には2条の凸帯をめぐらし、その間に印刻文を施こしている。胴部がほぼ直立な器形（13・14）とやや弯曲する器形（15）とがある。底部には低い長方形の脚を3～4ヶもつと思われるが、底部に一条の凸帯を有する器形（13）と縦に凹みをもつ器形（16）とがある。

鉢形土器（図版11・17）

鉢形土器は土師質（1）と須恵質（2・3・4・5）とがあり、大部分の口縁部は肥厚し、すこし立ち上がっており、須恵質の鉢の口縁外面に自然釉が認められるもの（3）があり、片口部が残存していたのは（2）のみであり、他は不明である。底部は平底で、高台を有する（10）と有しない（8・9）とがあり、内面がザラザラしているもの（10）と磨いたように使用痕を残すもの（9）がある。

擂鉢形土器（図版11・17）

擂鉢形土器は陶質（備前焼か）（6・7）と瓦質（11・12）があり、陶質の擂鉢形土器は口縁部は上下に拡張し、立ち上がりぎみである。（7）は片口部が残存していたが、（6）は不明である。瓦質の擂鉢形土器は体部の弯曲のまま口縁にいたり、やや肥厚している。底部は平底を呈し、擂目が12本単位のもの（11）と6本単位のもの（12）とがあるが、原体は3本単位の可能性がある。

土釜（図版12・13・17・18）

土釜には羽釜と三足を有する足釜（14）と鉗を胴部の中央付近にもち直立の口縁を有する茶釜形土器ともいるべき器形（14・15・16・17・18）とがある。

羽釜は口縁部が直立する器形（3・6・7・8・9）と内弯する器形とがあり、内弯する器形には（5・11・12）のように急カーブを描くものもあり、内傾程度のもの（17・13・18・4・13）があり、口縁部が短かいもの（2・4）や、口縁部に穿孔をもつもの（6）がある。鉗部の形能も種々あるが、胴部最大径より鉗部径の短かくなると思われる（2・5）があり、実用に適さないと思われるが、他は大体実用に適した鉗をもっている。底部まで復原が可能であったのは（17・13）のみであった。

足釜は脚部（14）が数点出土しているが、胴部に付属したものではなく、どの口縁部に付属していたかは不明であり、羽釜（2・5）のように形骸化した鉗をもつ可能性が強い。

茶釜形土器は口縁部が直立する（14）とやや内傾する短かい口縁部（15）があり、

鎧部の断面は三角形を呈するが、(14)は鎧部の上部に一对の把手を有している。底部は平底を呈している。(15)は肩部に2条の沈線を有している。

埴輪？（図版9・14—29、9・15—32）

埴輪（29）は第7地区の盛土内から出土したのであるが、弯曲する埴質土器の端に粘土帯を貼り付けて一部分突出している。破片の左の形状を明確にしがたいが、形象埴輪の破片と思われる。(32)は直径16cm程であるが、埴質を呈し、線刻と思われるものがあり、小片であるが円筒埴輪の可能性がある。

瓦（図版10・16）

軒丸瓦（18）は三ツ巴文をもつが、その形状は欠損部が多いため不明である。内面には布目を明確に残している。平瓦（17）は布目がなく、中央に1ヶの釘穴がある。質は両方とも須恵質であり、6・7地区の石群造構から出土している。

石製品（図版9・15）

滑石製の双孔円板が第5地区より2個出土している。(33)は黒褐色砂質土層から出土し、直径3.1cmであり、(34)は灰褐色砂質土層から出土し直径2.8cmである。

砥石（35）は第1地区褐色砂質土層から出土し、2個の穿孔があり4面を使用している穿孔の上部に3本の線刻がある。砥石（36）は8地区の盛土から出土し、砥石（37）は石群造構内から出土している。石質に関しては未鑑定であり明確にしがたい。ただ（37）は自然石を使用した雑なものである。

以上、出土遺物の概観を述べたが、弥生時代後期や古墳時代の遺物は造構に付隨するものではない。中世遺物においても第6・7地区石群造構内から出土したものが多く、鎌倉時代から室町時代初期の遺物を中心とするようである。

回数	番号	器種	器形	出土地区 出土量(通構)	法観(cm) 現存()	形態の特徴	成形・調整法	備考
7 · 14	1	須恵器	蓋	第6トレンチ 褐色砂質土層	口径 20.8 器高 (2.6)	○天井部と口縁部をわける 稜線はなく、一条の沈線 になる。 ○大型化を量する。	○回転ナデ調整	焼成 胎土 色調 良好 1mm程度の 粒を含む 暗灰色
	2		环	第6トレンチ 褐色砂質土層	口径 17.2 受部径 20.8 器高 (4.2)	○たちあがりはやや内傾度 が大きい。端面内側は浅く くぼんでいる。 ○受部は水平にのびて、端 部の棱はあまり。	○回転ナデ調整	焼成 胎土 色調 良好 黒色粒を含む 白灰色
14	3		蓋	第1地区 擾乱層	口径 16.6 器高 (1.2)	○口縁部内面にかえりをも ち、かえりの先端は口縁 端部より短かい。	○回転ナデ調整	焼成 胎土 色調 良好 粗く、砂粒 を含む 灰色
7 · 14	4		蓋	第9トレンチ 褐色砂質土層	口径 10.2 器高 (2.3)	○口縁部内面にかえりをも ち、かえりの先端は口縁 端部より下方に突出して いる。 ○天井部はすこし高くなっ ている。	○回転ナデ調整 ○天井部は不整方向 のナデ	焼成 胎土 色調 良好 良好 黒灰色
5			蓋	第9トレンチ 褐色砂質土層	口径 12.8 器高 (1.5)	○口縁部内面にかえりをも ち、かえりの先端は口縁 端部より下方に突出して いる。	○回転ナデ調整 ○かえりは貼付けによ る	焼成 胎土 色調 良好 粗い 灰色
6			蓋	第6トレンチ 褐色砂質土層	口径 器高 (3.0)	○天井部は丸味をもつ。 ○天井部と口縁部とをわけ る稜線、棱はみどめられ ない。	○回転ナデ調整 ○内面天井部未調整 ○外面部天井部ヘラ切 り	焼成 胎土 色調 良好 1~3mmの砂 粒を含む 灰色
7			蓋	第5地区 淡茶褐色砂質 土層	口径 10.6 器高 3.8	○天井部と口縁部とをわけ る稜はみとめられない。 ○天井部付近に一条の沈線	○天井部内面は不整 方向のナデ、外面 は未調整 ○回転ナデ調整	焼成 胎土 色調 良好 良好 淡灰色
8			环	第6トレンチ 褐色砂質土層	口径 11.6 器高 (2.8)	○たちあがりが内傾し、才 常に低い。 ○口縁端部はすこし立ち上 がっている。	○回転ナデ調整 ○かえりは貼付けによ る	焼成 胎土 色調 良好 良好 灰色
9			环	第1地区 白褐色砂質 土層	口径 器高 (1.8)	○底部は平担で棱をもって 立ち上がる。	○回転ナデ調整 ○底部は未調整	焼成 胎土 色調 良好 2~3mmの砂 粒を含む 外灰褐色 内白灰色
10			环	第11地区 擾乱層	口径 器高 (2.4)	○底部は平担になり、カー ブをもって立ち上がる。	○回転ナデ調整 ○底部は未調整	焼成 胎土 色調 良好 2~3mmの砂 粒を含む 淡灰色
11			环	第10地区 灰褐色砂質 土層	口径 10.4 器高 (2.5)	○体部は椭形を呈する。 ○口縁部はすこし外反し、 端部はすこし丸味をもつ。	○回転ナデ調整	焼成 胎土 色調 良好 1mm前後の 砂粒を含む 淡白灰色
12			环	第1地区 擾乱層	口径 11.4 器高 3.7	○体部の外傾度は大きい。 ○口縁部はすこし外反する。 ○体部と底部の区別がやや はっきりしていく。	○回転ナデ調整	焼成 胎土 色調 甘い 粗く砂粒を 多く含む 淡褐色

回	番号	菌種	変形	出土地区 出土層(遺構)	法県(cm) 現存()	形態の特徴	成形・調整法	備考
7	13	須恵器	环	第1地区 褐色砂質土層	口径 器高 (2.5)	○環12と同じ	○内面 回転ナデ調整 ○外面 風化はげしく不明	焼成 良好 胎土 黒色を含む 色調 淡灰色
	14		环	第1トレンチ 盛土	口径 14.9 器高 2.6	○体部は碗形を呈する。	○回転ナデ調整	焼成 良好 胎土 精良 色調 白灰色
	15		环	第1地区 褐色砂質土層	口径 器高 (3.7) 底径 10.0	○高台を有し、底部と体部との境界は屈曲し、明瞭である。 ○直線的に外傾する体部。 ○ほぼ直立する高台。	○回転ナデ調整	焼成 やや甘い 胎土 石英を含む 色調 淡灰色
	16		环	第10地区 灰褐色砂質 土層	口径 (11.2) 器高 3.5 底径 10.0	○底部と体部との境界は弓彌である。 ○体部はやや外傾しているがすこし内寄ぎである。	○回転ナデ調整 ○底部はタキ孔調整	焼成 良好 胎土 微小砂粒を含む 色調 灰色
	17		环	第7地区 擾乱層	口径 14.9 器高 3.5	○ほぼ直線的に外傾する体部。 ○口縁部がすこし丸味を持ち外反す。	○内面 回転ナデ調整 ○底部付近 不整方向のナデ調整	焼成 良好 胎土 精良 色調 灰色
	18	練 粗 須 恵 器	环	第10地区 灰褐色砂質 土層	口径 12.8 器高 4.9 底径 12.1	○底盤の底部より、段をもって立ち上がっていく。 ○すこし丸味をもつ胴部より圓形の頸部につづく。 ○外折する口縁部に、丸味をもつ口端部。 ○胴より上部に棘線。	○回転ナデ調整 ○頸下部より底部にかけてはヘラケメリ	焼成 良好 胎土 良 色調 淡灰色
	19	須 恵 器	長 頸 瓶	第7地区 石群遺構	口径 14.0 器高 (6.5)	○頸部は外反しながら聞く。 ○口縁部は外折し、丸味をもつ。	○内面 回転ナデ調整 ○外面 不整方向にナデ調整	焼成 良好 胎土 粗く、砂粒を含む多く 色調 灰色
	20		瓶	第5地区 黒褐色砂質 土層	口径 底部径 13.8 器高 (6.3)	○頸部の張りはすくなく、ヘラ抜きの沈装の装飾がある。 ○底部と胴部最大径のところに、ヘラ抜き沈窓がめぐらされている。	○回転ナデ調整	焼成 良好 胎土 精良 色調 淡灰色、部分的に暗灰色
	21	短 頸 甕	第5地区 灰褐色砂質 土層	口径 底部径 13.8 器高 (9.0)	○肩部は張らず、球形にちかい胴部。 ○底部は丸味をもち、体部との区別は明瞭でない。	○内面 回転ナデ調整 ○外面 不整方向にナデ調整	焼成 良好 胎土 1~3cm程度 の砂粒を含む 色調 暗灰色	
	22	甕	第5地区 灰褐色砂質 土層	口径 23.0 器高 2.0	○すこし立ち上がる口縁部	○回転ナデ調整	焼成 良好 胎土 精良 色調 灰色	
	23	甕	第9地区 盛土	口径 器高 -	○「頸部はやや外反するよう立ち上がる。」	○内面 肩部以下は同心円タキ孔調整の上からナデ調整を施こし、外面は平行タキ孔調整 ○他の回転ナデ調整	焼成 良好 胎土 精良 色調 灰色	

図版 番号	器種	器形	出土地 出土層(遺構)	法量(cm) 現存()	形態の特徴	成形・調整法	備考
7 14	須恵器	壺	第5地区 黒褐色砂質土層	口径 器高 (20.5)	○ほぼ球形にさかい胴部であるが、最大径は上部にある。 ○肩部がすこしいびつになっているのは焼成時であろうか。 ○口頭部基部より直立して立ち上がるようである。	○外底底部は不整方 面に平行タタキ。 胴部は縦に平行タタキを施す。 ○内面は同心円タタキ調整 ○口頭部は内外とも回転ナデ調整	焼成 良好 胎土 精良 色調 淡灰色
			第1地区 褐色砂質土層	口径 16.8 器高 (1.8)	○すこし立ち上がりざみになり縁部で外反する口縁部。	○回転ナデ調整	焼成 やや甘い 胎土 1~2mmの砂 粒を含む 色調 白灰色
26	壺	壺	第5地区 茶褐色砂質土層	口径 器高 (1.7) 底径 12.6	○底部は外にすこし広がっている。 ○段をもって立ち上がっていく。 ○波状文と恐われる縦刻がすこし残存している。	○回転ナデ調整	縫合の可能性 あり 焼成 良好 胎土 精良 色調 灰色
8 14	器台	壺台	第5地区 黒褐色砂質土層	口径 器高 (6.5) 底径 18.2	○底部はすこし肥厚して立ち上がる。 ○段をもつてから弯曲しながら立ち上りがっていく途中で凸縁と凹縁をもつ。 ○2側面に液状文がめぐらされている。	○回転ナデ調整	焼成 良好 胎土 精良 色調 白灰色
28	器台	壺台	第5地区 盛土	器高 (19.3) 胴径 12.8	○脚部は1~2条の低くつまみだした凸縁によって3段以上に区分し、下2段に波状文を数回重ねてめぐらしている。 ○脚部の各段にはそれぞれ頂部を丸くした三角形の透しが施され、各段とも三方向からと推定される。	○外底2段目はカキ 目調整で上部はカキ目調整の上から回転ナデ調整 ○内面は回転ナデ調整	焼成 良好 胎土 精良 色調 灰色
8 15	上部器 土器	小皿	第9地区 pit 7	口径 器高 7.8 底径 4.0	○底部より折れるように立ち上がる。 ○口縁は、丸味をもつ。	○外側体部は指压 痕を残し、他は 横ナデ調整	焼成 良好 胎土 精良 色調 黄褐色
2	小皿	小皿	第6~7地区 床土	口径 器高 7.0 底径 1.9	○底部は丸底。 ○底部と体部の区別はしにくくカーブをもって立ち上がる。	○底部外側は末調整 ○口縁付近は横ナデ 調整	焼成 良好 胎土 精良 色調 淡黄褐色
3	小皿	小皿	第6~7地区 石群遺構	口径 器高 8.6 底径 4.4	○底部は平底。 ○体部は底部から折れるよう立ち上がる。	○底部外側は末調整 ○口縁付近は横ナデ 調整	焼成 良好 胎土 精良 色調 淡黄褐色
4	小皿	大皿	第8地区 大pit	口径 器高 3.7 底径 2.0	○体部は直線的である。 ○内側口縁に段をもつ。	○外側体部は末調整 ○他は横ナデ調整	焼成 やや甘い 胎土 少量の輝石を 含む 色調 白褐色
5	小皿	小皿	第6~7地区 石群遺構	口径 器高 8.6 底径 2.5	○底部は小さな平底。 ○底部と体部の区別しにくく。	○未調整 ○口縁付近は外側に 爪痕	焼成 やや甘い 胎土 1~2mmの砂 粒、金雲母を含む 色調 淡褐色

区段	番号	器種	出土地区 出土層(遺構)	法量(cm) 現存()	形態の特徴	成形・調整法	備考
8 + 15	6	上 師 器 ・ 土 器	第6・7地区 石器造構	口径 9.4 器高 1.9 底径 6.0	○底部は平底。 ○底部よりカーブをもって立ち上がり、口縁部で外反する。 ○底部と体部の区別しにくい。	○底部未調整 ○口縁部付近は横ナデ調整	焼成 良好 胎土 1mm前後の砂粒、長石、石英、雲母を含む 色調 黄褐色
7		小皿 質土器	第8地 大pit	口径 8.0 器高 2.0 底径 3.8	○底部は凹底。 ○底部より折れるように立ち上がり、外開きの体部。 ○口縁部付近でやや肥厚し内寄している。	○体部に指圧痕が残る。 ○口縁部付近は横ナデ調整	焼成 やや甘い 胎土 極めて精良 色調 乳黃褐色
8		小皿	第3トレンド 灰褐色砂質 土層	口径 10.6 器高 1.4	○底部は平底。 ○底部よりカーブを持って体部にいたる。 ○底部と体部の区別しにくい。	○風化はげしく調整不明	焼成 良好 胎土 精良 色調 白褐色
9		小皿	第6・7地区 灰褐色砂質 土層	口径 12.1 器高 1.7 底径 9.6	○底部は平底。 ○底部より折れるように体部にいたる。 ○口縁部内側に一条の沈線。	横ナデ調整	焼成 良好 胎土 微少砂粒を含む 色調 白褐色
10		小皿	第8地区 大pit	口径 8.5 器高 1.9 底径 4.1	○底部はやや底凹。 ○底部より折れるように体部にいたる。 ○口縁部は丸味をもつ。	○全体に指圧痕、指ナデ調整が残っている。	焼成 やや甘い 胎土 精良 色調 乳黃褐色
11		小皿	第8地区 大pit	口径 9.6 器高 2.0 底径 4.8	○底部は平底。 ○底部より折れるように体部にいたる。 ○口縁部はやや外反する。	○横ナデ調整	焼成 良好 胎土 微少砂粒を含む 色調 白褐色
12		大皿	第3トレンド 灰褐色砂質 土層	口径 15.0 器高 2.5 底径	○底部はやや丸底。 ○底部よりカーブをもって立ち上がって口縁にいたる。 ○口縁端部は尖っている。	○口縁付近内外共横ナデ調整 ○底部内側不整方向のナデ調整 ○底部外側未調整	焼成 良好 胎土 2~3mmの砂粒を含む 色調 黄褐色
13		大皿	第2地区 褐色砂質土	口径 17.4 器高 1.8 底径推定11	○底部よりカーブをもって立ち上げていく。 ○底部と体部の区別しにくい。	○全体に横ナデ調整	焼成 やや甘い 胎土 1~3mmの砂粒を含む 色調 喀灰褐色
15 14		大皿	第6・7地区 休土	口径 19.8 器高(1.3) 底径	○平底と思われる底部よりカーブをもってやや立ち上がる。 ○口縁端部は平底になる。	○全体にナデ調整	焼成 甘い 胎土 微少砂粒を含む 色調 白褐色
8 + 15		大皿	第1地区 褐色砂質土層	口径 21.6 器高(3.0)	○丸底と思われる底部よりカーブをもって立ち上がる。 ○底部と体部の区別しにくい。	○風化はげしく調査不明	焼成 甘い 胎土 5mm前後の砂粒を含む 色調 黄褐色
16		高 環 脚 部	第10地区 灰褐色砂質 土層	口径 5.3 器高(5.3) 底径	○ややふくらみをもつ環部。 ○折れるように環部につづく。		焼成 良好 胎土 1mm前後の砂粒黒雲母を含む 色調 淡茶褐色
18		高 环	第3トレンド 盛土	口径 1.6 器高(1.6) 底径	○平坦な环部。	○しづり目を残す。	焼成 良好 胎土 微少砂粒を含む 色調 赤褐色

回 版	番 号	器 種 形	出 土 地 区 出土層(標記)	法量(cm) 現存()	形 態 の 特 徴	成形・調整法	備 考
8 · 15	19	上 境 部 ・ 上 唇 部	第1地区 褐色砂質土層	口径 11.6 器高 (2.8)	○カーブをもつ体部。 ○口縁部は丸味をもつ。	○全体に横ナダ調整 ○外側に彩色？	焼成 やや甘い 胎土 2~3mmの砂 粒、石英、 長石・雲母を含む 色調 淡黄褐色
	20	境 部 ・ 上 唇 部	第12地区 粘土	口径 10.8 器高 (3.0)	○底部からカーブをもつて 口縁部にいたる。 ○口縁部でやや外反する。 ○口縁部内側に段をもつ。	体部内面に暗文を 施す。	焼成 良好 胎土 精良 色調 赤褐色
	21	境	第2地区 混乱層	口径 12.8 器高 4.5	○体部はやや弯曲している。 ○口縁付近で直立にちかくなる。 ○口縁端はやや外反する。	○口縁付近横ナダ調整	焼成 やや甘い 胎土 2~3mmの砂 粒、雲母を含む 色調 淡茶褐色
	22	境	第2地区 褐色砂質土層	口径 13.9 器高 4.6	○体部はやや弯曲するが直立にさくる。 ○口縁外側に浅い凹線をもつ。 ○口縁端は内傾する。	○風化はげしく調整 不明	焼成 甘い 胎土 2~3mmの砂 粒を含む 色調 淡黄褐色
	23	境	第2地区 表土	口径 14.8 器高 (2.7)	○カーブをもつて口縁にいたる。 ○器肉は口縁へ徐々に薄くなる。	○風化はげしく調整 不明	焼成 良好 胎土 2~3mmの砂 粒を含む 色調 赤褐色
	24	境	第2地区 褐色砂質土層	口径 16.3 器高 (3.4)	○弯曲する体部は口縁付近で直立する。 ○口縁はやや外反する。 ○口縁端はやや内傾する。	○全体に横ナダ調整	焼成 やや甘い 胎土 2~3mmの砂 粒、金雲母を含む 色調 淡茶褐色
	25	無 頭 蓋	第2地区 褐色砂質土層	口径 8.8 器高 14.0	○底部は丸味。 ○胴部は球状に近いが、上部ではやや立ち上がりぎみになる。 ○口縁部は体部よりやや内傾しながら立ち上がる。 ○口縁端部はやや丸味をもつ。	○外側全体に不整方 向のハケ目調整 ○内側底部は指圧痕 を残し、未調整	焼成 やや甘い 胎土 精良 色調 淡茶褐色
	26	境	第2地区 混亂層	口径 16.7 器高 (6.0)	○口縁部は直立ぎみから外 反していく。	○口縁部は内外とも 横ナダ調整 ○肩部は縦にこまかいハケ目調整	焼成 やや甘い 胎土 2~3mmの砂 粒、石英、長石 ・雲母を含む 色調 淡茶褐色
9 · 15	27	甕 (片 口)	第8トレンチ 褐色砂質土層	口径 19.0 器高 (9.6)	○胴部は全体的に弯曲して いる。 ○口縁部は胴部の弯曲のま ま口縁にいたる。 ○口縁部を折り曲げて片口 になっている。	○外側網上部は縱方 向に深いハケ、下 部は横方向に深い ハケ調整 ○内側全体に横方向 にこまかいハケ調 整	焼成 やや甘い 胎土 2~3mmの砂 粒、石英、長石 ・雲母を含む 色調 茶褐色
8 · 15	28	甕 底部	第2地区 新褐色砂質 土層	器高 (7.1) 底径 10.0	○内側底部を凹まして いる。 ○底部端は丸味をもつ。	○外側縱方向に深い ハケ目調整 ○内側上部は横方向 にハケ目調整。下 部は指で押しつけ ている。	焼成 良好 胎土 1~2mmの砂 粒、石英、長石 ・雲母を含む 色調 淡黄褐色

回 版	番 号	器 種	出 土 地 区	法 規 (cm) 現存 ()	形 態 の 特 徴	成 形・ 調整法	備 考
10 · 16	1	磁 器	第6地区 胎土	口径 18.4 器高 (2.0)	○口縁部は外反する。 ○外面に文様を有す。		胎土 白色の硬質 色調 白
	2	碗	第6・7地区 石群遺構	口径 12.6 器高 (3.0)	○やや弯曲する体部から口 縁部につづく。 ○外面に文様を配す。		胎土 灰白色の硬 質 青白色の釉
3		碗	第9地区 pit	器高 (3.7) 底径 6.2	○底部は輪高台。 ○底部より弯曲しながら体 部にいたる。 ○内側底面に文様を配す。	○釉は外側底面には かかっていない ○ロクロ成形	胎土 灰白色の硬 質 青白色の釉
4		碗	第6・7地区 石群遺構	器高 (2.1) 底径 4.6	○底部は輪高台を削り出 している。	○釉は底部外面には かかっていない ○ロクロ成形	胎土 灰白色の硬 質 緑白色の釉
5		碗	第6・7地区 石群遺構	器高 (2.1) 底径 6.0	○底部は輪高台。 ○底部よりすこし水平にの び、立ち上がりっていく。 ○内側底面に文様を配す。	○釉は底部外面には かかっていない ○ロクロ成形	胎土 灰白色の硬 質 青白色の釉
6		碗	第8トレンチ 褐色砂質土層	器高 1.8 底径 4.2	○底部は輪高台。 ○高台上部に…条の染付。	○ロクロ成形	胎土 淡白灰色 乳緑色の釉
9		碗	第10地区 灰褐色砂質 土層	器高 1.7 底径 3.8	○底部に輪高台。 ○青絵染付を有する。	○ロクロ成形	胎土 白色 白色の釉
10	7	陶 器	第12地区 胎土	器高 (1.7) 底径 3.2	○底部はけずり出し高台を 「もち中央部に穿孔をもつ。 ○底部より急角度で弯曲し 立ち上がりがっていく。」	○回転ナデ調整	焼成 やや甘い 胎土 精良 色調 赤茶色
10 · 16	8	施 繪 陶 器	第9地区 灰褐色砂質 土層	器高 (1.6) 底径 4.6	○底部はけずり出し高台。 ○底部より腰をもって立ち 上がりがっていく。 ○内側に黒茶色の釉。	○ロクロ成形	焼成 良好 胎土 精良 色調 乳褐色
	10	蓋	第5地区 井戸遺構内 灰褐色粘土	口径 10.2 器高 (2.2)	○天井部は円弧を描く。 ○垂直なかえりをもつ。	○回転ナデ調整	焼成 良好 胎土 精良 色調 白黃褐色
11		埴 輪	第6・7地区 石群遺構	口径 13.4 器高 (3.5)	○口縁部はうすくなり、 一束の沈詰がめぐる。 ○暗文は内側にやや密にレ コード状にめぐらされ、 外側の1跡付近は横方向 体部は斜めに施こされる。	○風化はげしく調整 不明	焼成 良好 胎土 精良 色調 淡灰黑色
12		埴 輪	第12地区 灰褐色砂質 土層	口径 16.8 器高 4.8 底径 6.5	○口縁部はうすく段をもつ。 ○体部は底部よりカーブを もちらがら立ち上がりがって いく。 ○断面台形のややしっかり した高台をもつ。 ○暗文は内側ではよく密に レコード状に施こされ、 外側では細く粗く、連續 せず、単位に分かれれる。	○口縁付近横ナデ調 整 ○体部外面は未調整	焼成 やや甘い 胎土 精良 色調 灰褐色

図版 番号	器種	器形	出土場所 (遺構)	法規(cm) 現存()	形態の特徴	成形・調整法	備考
10 ・ 16	瓦質土器	火舍	第6・7地区 石群遺構	口径 30.0 器高 (25.2) 底径 30.6	○底部は平底で、やや外開きの足を3ヶ所つ。 ○胴部は直立している。 ○口縁部はやや内弯し、端面は平底である。 ○口縁下に2条の凸帯をめぐらしその間に印刻文を施す。	○全体的にナデ調整	焼成 やや甘い 胎土 精良 色調 黒灰色
14		火舍	第6・7地区 石群遺構	口径 29.6 器高 (7.5)	○直立する胴部より口縁にいたる。 ○口縁はやや肥厚し、端面は平底である。 ○口縁下に2条の凸帯をめぐらしその間に印刻文を施す。	○口縁部内面横ナデ調整 ○他は鉛離はげしく不明	焼成 良好 胎土 精良 色調 暗灰色 ○二次的加熱あり
15		火舍		口径 34.0 器高 (6.0)	○口縁部は肥厚し、やや内弯する。 ○口縁下に2条の凸帯をめぐらしその間に印刻文を施す。	○風化はげしく不明	焼成 やや甘い 胎土 微少砂粒を含む 色調 淡灰黒色
16		火舍	第6・7地区 石群遺構	器高 9.9 底径 32.9	○底部は平底で足を3~4ヶ所するとと思われる。 ○底部から外開きに立ち上がりしていく体部には縫みを施す。	○不整方向にナデ調整 ○底部外面は未調整	焼成 良好 胎土 1mm前後の砂粒を含む 色調 淡白灰色
11 ・ 17	土質土器	鉢	ピット9	口径 29.3 器高 (3.0)	○外開きの体部から直立に折れる。 ○口縁上端は平底になる。	○風化はげしく不明	焼成 甘い 胎土 1mm前後の砂粒を含む 色調 淡灰褐色
2	泥質土器	鉢(片口)	第6・7地区 石群遺構	口径 31 器高 (4.2)	○肥厚して上方へ突出する ○口縁部。 ○口縁上端は丸みを帯びて尖りぎみにむきまる。 ○片口になっている。	○口縁部の内外面は横ナデ調整	焼成 良好 胎土 1~2mmの砂粒を含む 色調 灰色
3		鉢	第6・7地区 石群遺構	口径 26.2 器高 (2.9)	○肥厚して上方へ突出する。 ○口縁部。 ○口縁上端丸みを帯びる。	○口縁部の内外面は横ナデ調整 ○口縁部外面のみ自然釉	○片口部不明 焼成 良好 胎土 砂粒を含む 色調 明灰色
4		鉢	第8地区 盛土	口径 35 器高 (4.5)	○口縁部は肥厚し、口端は尖りぎみになる。 ○体部内外面に凹凸がある。	○口縁部は横ナデ調整 ○外面はカキ目調整 ○内面は不整方向にナデ調整	焼成 やや甘い 胎土 2~3mmの砂粒を含む 色調 灰色
5		鉢	第6・7地区 灰褐色砂質土	口径 26.1 器高 (3.6)	○2と同形態。 ○片口部は不明	○内外とも横ナデ調整	焼成 0.5mm程度の砂粒 色調 灰色
6	陶質土器	塗鉢	第6・7地区 石群遺構	口径 29.6 器高 (3.7)	○口縁部は肥厚し、上下に捻曲している。 ○捺目は8本単位。	○全体的にナデ調整	焼成 良好 胎土 1~5mmの砂粒を含む 色調 淡灰褐色

測定番号	器種	出土地区	法量(cm) 出土層(通構)	形態の特徴	成形・調整法	備考
11 17	陶質土器 鉢 片口	第6・7地区 石群遺構	口径 29.0 器高 (7.9)	○上下にやや拡張した口縁部で上端部は夷りぎみになる。 ○全体はやや内寄ぎみになり、外外面に凹凸がある。	○全体的にナテ調整	焼成 良好 粘土 1~5mmの砂粒を含む 色調 茶灰色
8	須恵質土器 鉢底部	第3トレンチ 灰褐色砂質土層	器高 (2.5) 底径 10.9	○底部より弯曲しながら全体へ。	指ナテ調整と思われる	焼成 良好 粘土 1mm程度の砂粒を含む 色調 灰色
9	鉢底部		器高 (2.5) 底径 12.4	○底部端は粘土が押えつけられはみでている。	○外面指ナテ調整 ○内面は磨いたようになっている。使用のためか	焼成 良好 粘土 精良 色調 明灰色
10	鉢底部	第6・7地区 石群遺構	器高 (3.3) 底径 12.6	○断面が台形を呈する高台を貼り付ける。	○内面がザラザラしている ○高台内面はナテ ○全体はケズリのまま未調整	焼成 良好 粘土 1~5mm程度の砂粒を含む 色調 明灰色
11	瓦質土器 擂鉢		口径 32.2 器高 (11.2)	○すこし内寄ぎみの体部。 ○口縁部は肥厚し、丸味をもっている。 ○擂目は12本単位と思われるが、原体は3本か。	○風化はげしく不明 ○外曲体部は凹凸が残り未調整か	焼成 甘い 粘土 微小砂粒を含む 色調 灰黑色
12			口径 6.0 器高 (6.0) 底径 13.8	○底部と修部の区別は明瞭で段段を有する。 ○擂目は6本単位。	○風化はげしく不明	焼成 甘い 粘土 1mm前後の砂粒を含む 色調 灰黑色
12 17	土質土器 羽釜		口径 22.8 器高 29.0 器高 20.2 胴部最大径 25.0	○底部は丸底。 ○胴部はあまり弯曲しないではほ垂直に立ち上がる。 ○断面長方形で端面が角ばった鈍部が、やや下がりぎみに貼り付ける。 ○口縁部はやや肥厚し、内寄ぎみである。外面上に2条の弱い凹線をめぐらす。	○鈍部、口縁部外面は横ナテ調整 ○内面ハケ口調整 ○鈍部以下は未調整	焼成 良好 粘土 1~2mm程度の砂粒、石英、長石、空母を含む 色調 淡灰褐色 ○胴部底部に塗付青
12 17	瓦質土器 茶釜形土器		口径 16.5 器高 29.8 器高 15.8 胴部最大径 26.0 底径 19.2	○底部は平底。 ○胴部は底部より折れるように外側に立ち上がる。 ○断面三角形で端面が尖った鈍部が、腹部最大径部に貼り付ける。 ○鈍部上部に穿孔された一对の把手を貼りつける。 ○口縁部は肩部より折れるように垂直に立ち上がる。	○内外面ともナテ調整	焼成 良好 粘土 精良 色調 黒灰色
15	茶釜形土器		口径 19.6 器高 (5.5)	○丸味をもった肩部より内寄ぎみに立ち上がる口縁部。 ○肩部に2条の沈線。	○内外面ともナテ調整	焼成 良好 粘土 精良 色調 淡灰褐色
16			器高 (4.0) 器高 31.1	○断面三角形で端面が尖った鈍部を貼り付ける。	○内外面ともナテ調整	焼成 良好 粘土 精良 色調 淡灰褐色、灰黑色

回版	番号	器種	器形	出土地区 出土層(施構)	法量(cm) 現存()	形態の特徴	成形・調整法	備考
12 17	17	瓦質土器	茶葉形土器	第六・7地区 石群遺構	器高(4.5) 底径 18.0	○底部は平底。 ○胴部は底部より外開きに立ち上がっていく。	○内外面ともナデ調整	焼成 良好 胎土 精良 色調 灰黒色
	18				器高(13.4) 鈎径 30.4	○胴部はあまり弯曲しないで垂直に立ち上がる。 ○断面三角形で端面が尖った鈎を貼り付ける。	○内外面ともナデ調整	焼成 良好 胎土 精良 色調 淡茶褐色
12 18	1	瓦質土器	羽釜		口径 26.6 器高(10.0) 鈎径 32.6	○断面長方形で端面が丸味をもつ鈎を貼り付ける。 ○口縁部は内窪し、2条の凹線をめぐらす。 ○口縁端面はすこし囲んでいる。	○内面は荒いハケ目 ○鈎部は横ナデ調整 ○胴部外側は木調整	焼成 良好 胎土 2mm程度の 砂粒(チャート 金雲母)を含む 色調 外 淡茶灰色 内 黒灰色
	2	上師質土器	羽釜		口径 25.2 器高(6.5) 鈎径 28.8 胴部最大径 28.6	○弯曲した胴部から内傾した口縁部につづく。 ○断面長方形の短い鈎が、やや上向きに貼り付ける。 ○短径と胴部最大径はほぼ同じ。 ○口縁は短く内傾している。	○口縁付近は横ナデ調整 ○胴部外側は木調整で粗圧痕が残る	焼成 やや甘い 胎土 1mm程度の 砂粒、石英、長 石を含む 色調 淡茶褐色 ○胴下部より煤付 着
	3		羽釜		口径 23.0 器高(10.0) 鈎径 27.0	○やや外開きになった胴部。 ○断面が放物線形の鈎が貼り付けられている。 ○口縁部は直立し、外面は凹凸がある。 ○口縁端部は尖っている。	○口縁部より鈎下部 まで外面は横ナデ調整 ○内面荒い不整方向 のハケ目	焼成 良好 胎土 精良 色調 淡茶褐色 ○鈎下部より煤付 着
	4	瓦質土器	羽釜		口径 23.4 器高 3.0 鈎径 26.2	○断面が方形の鈎が、やや上向きに貼り付ける。 ○口縁部は短く内傾している。 ○口縁端部は平坦で、すこし内側に広がっている。	○口縁部付近は横ナ デ調整	焼成 やや甘い 胎土 1~2mmの 砂粒を含む 色調 黒灰色
13 18	5		羽釜		口径 20.2 器高(4.1) 鈎径 26.0	○断面が台形の鈎がやや上 向きに貼り付けられてい る。 ○口縁部は内窪しており、 比較的短かい。	○墨化は少しき調整 不滑 ○胴部外側は木調整で粗圧痕が残る	焼成 やや甘い 胎土 1mm程度の 砂粒、金雲 母を含む 色調 黑灰色
	6		羽釜		口径 20.0 器高(6.4) 鈎径 24.6	○外開きの胴部。 ○端部を肥厚させ、丸味をもつ鈎を貼り付けられている。 ○口縁部は直立し、2個一対の空孔がある。	○横ナデ調整	焼成 やや甘い 胎土 1mm程度の 砂粒を含む 色調 淡灰色
	7		羽釜		口径 20.0 器高(5.7) 鈎径 27.2	○断面が長方形の短く、端部が丸味をもつ鈎を貼り付ける。 ○直立する口縁部は凹凸がある。	○内 口縁付近は横 ナデ調整。他は荒 いハケ目 ○外 横ナデ調整	焼成 やや甘い 胎土 精良 色調 外 乳灰褐色 内 茶褐色
	8	土解質土器	羽釜		口径 40.0 器高(6.4) 鈎径 34.6	○端部は肥厚し、丸味をもつ鈎を貼り付ける。 ○口縁部は直立し長く、やや肥厚させる。	○内 荒いハケ目 ○外 口縁部、鈎部 横ナデ調整	○鈎部より下部煤 付着 焼成 良好 胎土 1mm前後の 砂粒を含む 色調 淡茶褐色

回数	番号	器種	器形	出土地区 出土上層(遺構)	法量(cm) 現存()	形態の特徴	成形・調整法	備考
13 ・ 18	9	土師質土器	羽釜	第6・7地区 石群遺構	口径 40.0 器高 (6.5) 銅径 35.2	○端部を肥厚させ、尖っている器を貼り付ける。 ○口縁部は直立し、端部は尖っている。	○内 荒いハケ目 ○外 未調整	○銅部より下部焼付着 焼成 良好 胎土 精良 色調 淡茶灰色
	10	瓦質土器	羽釜		口径 32.8 器高 (7.4) 銅径 40.0	○端部は上部を肥厚させ丸味をつける器を貼り付ける。 ○口縁部はやや内窪し、外側に一条の沈線がある。 ○口縁端部内側に小さな凸棱をもつ。	○内 ハケ目 ○外 銅部より上部 は横ナデ調整	○銅部より下部焼付着 焼成 良好 胎土 1~3mm程 度の砂を含む 色調 淡灰色
	11	土師質土器	羽釜		口径 32.2 器高 (7.6) 銅径 43.6	○端部は肥厚し、丸味をもつ比較的良い器を貼り付ける。 ○口縁部はやや肥厚し、内窪している。2条の凹線をもつ。 ○口縁端部は内側に傾斜をもつ。	○内 不整方向のハ ケ目 ○外 横ナデ調整	焼成 胎土 やや甘い 1mm程度の 砂粒を含む 色調 白色
	12	瓦質土器	羽釜		口径 29.6 器高 (6.2) 銅径 38.8	○断面長方形で端部を丸味をもつ小さな器を貼り付ける。 ○口縁部はやや内傾ぎみである。2条の弱い凹線をもつ。 ○口縁端部は半扭でやや内側に肥厚している。	○内 不整方向のハ ケ目 ○外 銅部付近 ナ デ調整	焼成 胎土 やや甘い 砂粒を含む 色調 灰黑色
	13		羽釜		口径 31.8 器高 8.0 銅径 37.4	○断面長方形で端部を丸味をもつ小さな器を貼り付ける。 ○口縁部はやや内傾ぎみである。2条の弱い凹線をもつ。 ○口縁端部は半扭でやや内側に肥厚している。	○口縁内側は横方向 のハケ、その下は 不整方向のハケ	○銅部より下部焼 付着 焼成 やや甘い 胎土 1~2mmの 砂粒(石英・長 石)を含む 色調 淡灰色

V まとめにかえて

国鉄片町線の複線化に伴なって国守遺跡の発掘調査を実施した。その結果、鎌倉時代から室町時代初期に属する建物跡と石群遺構を検出したが、幅3～4mの範囲であり、大部分が調査範囲外になってしまい、その上後世の破壊も激しく遺構の性格を把握するにはいたらなかった。

江戸時代中頃以降と思われる井戸遺構も、それに付属する遺構は確認することができなかつたので、集落や街道などとの関係を把握することができず、性格を把握することができなかつた。

遺物は古墳時代中期頃から江戸時代頃までのものが出土している。中世遺物以外は遺構に付随したものではないが、付近に遺構が残存している可能性を物語つてゐる。とくに後期の弥生土器の破片が出土していることは、この付近の弥生時代後期の遺跡が知られていない現状において、今後の調査に期待される。

今回の調査では、遺跡の存在を確認した程度の成果しか上げることができなかつたが、調査中に実施した周辺の分布調査では、広範囲に遺物が採集されており、遺跡は広範囲に存在すると思われる。讃良川対岸においても中世遺物が採集され、遺跡が存在する可能性がある。

国守遺跡は東高野街道沿いに成立した集落跡と考えられる遺跡であるが、東高野街道は空海（弘法大師）の開山した高野山と東寺を拠点とし、東寺を出て、八幡、洞ヶ峯を越えて、現在の枚方市、交野市を経て、片町線の星田駅の前から寝屋川市の寝屋・打上の山すそを通り、国守町を通過して讃良川を渡って現在の四条畷市に入り、高野山へ続く主要街道であった。

このため空海の行脚はかなり広範囲にわたつており、「弘法伝説」なるものを伝承されている。寝屋川市内においても「弘法井戸」などの伝承が多く残され、東高野街道沿いの打上にもある。又東高野街道は石清水八幡宮の近くを通過しており、これらの伝承との関係なども考えていかなければならぬ。

寝屋川市内の東高野街道沿いの遺跡としては、当遺跡と寝屋・寝屋東遺跡などがあり、このようなことも今後の研究・調査していく必要があり、寝屋川市内の街道筋に成立した中世村落の形態が明確にしていかなければならぬ。このように今回の調査では、多くの問題を提起してくれたようである。

調査後、調査地区は第1地区の旧地形部以外は線路の下に埋まった状態になっている。もちろん保存したことにはならないが、国鉄・片町線と府道・枚方富田林泉州佐野線との間に旧地形を残している地区があり、そこには包含層と思われる上層と遺物の出土を確認することができた。幸いその地区は現状のままで残しておくことになった。

今後、片町線の複線化が完了することによって、周辺の開発が進むことが想像されるが、今回の調査によって周辺地域に遺跡の存在が考えられることから、開発行為についても慎重な態度が必要であり、遺跡の保存・保護も考えていかなければならない地域である。

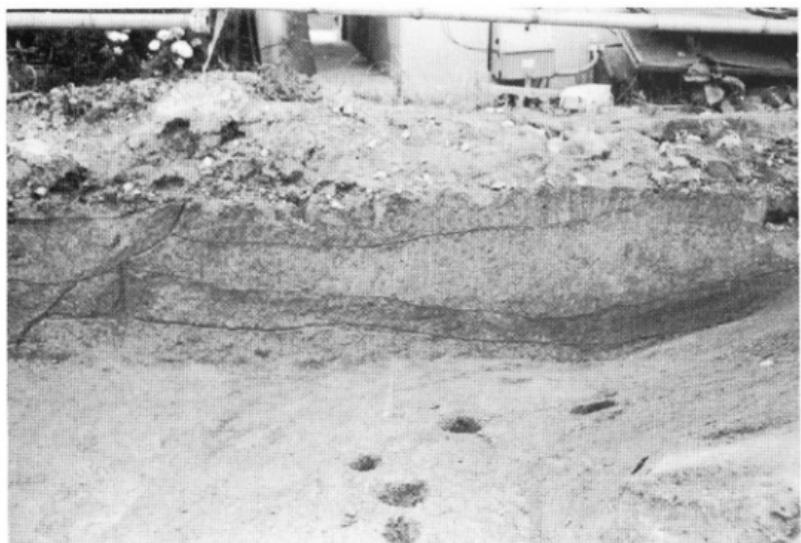
図 版



調査前の状況



第1・2地区 調査状況



第5地区 断面



第11地区 旧表土及び野ツボ



第5地区 井筒の板木



井戸造構の掘り肩



第5地区 井戸遺構



井戸遺構の井筒



第6・7地区 石組遺構

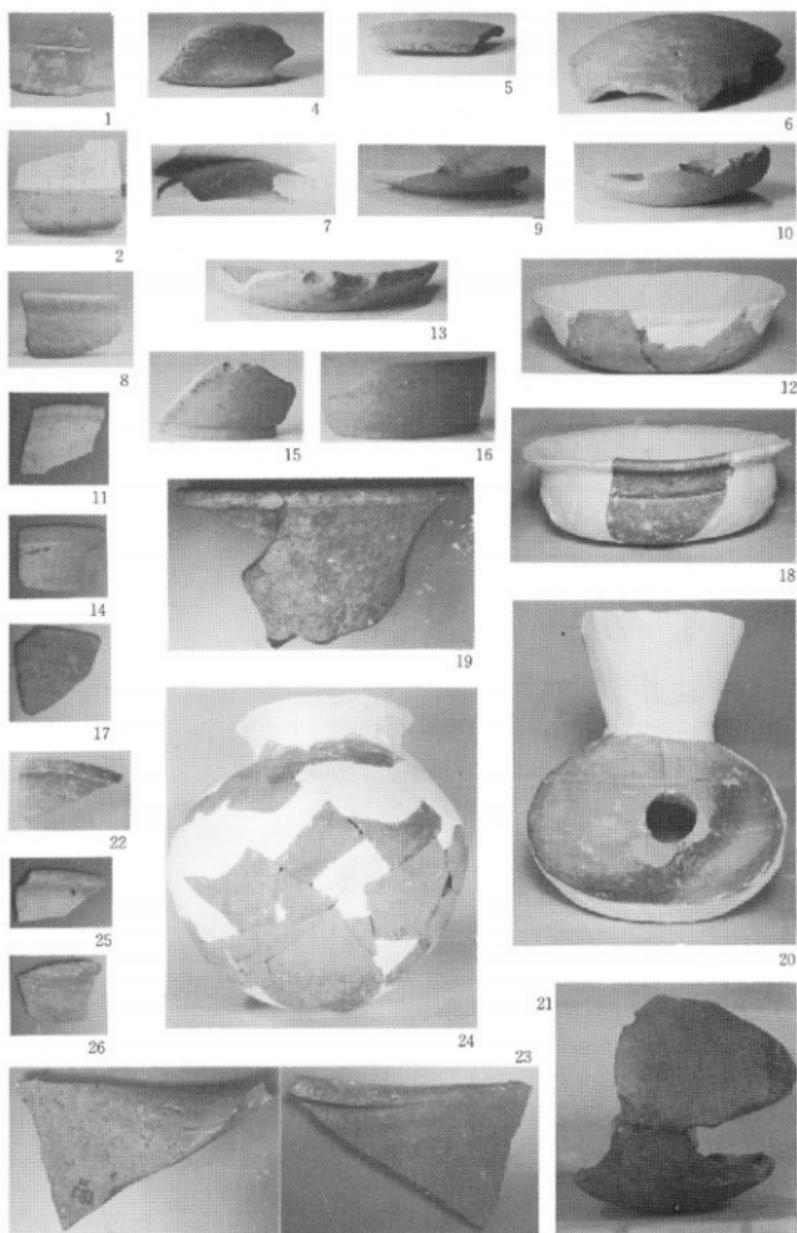


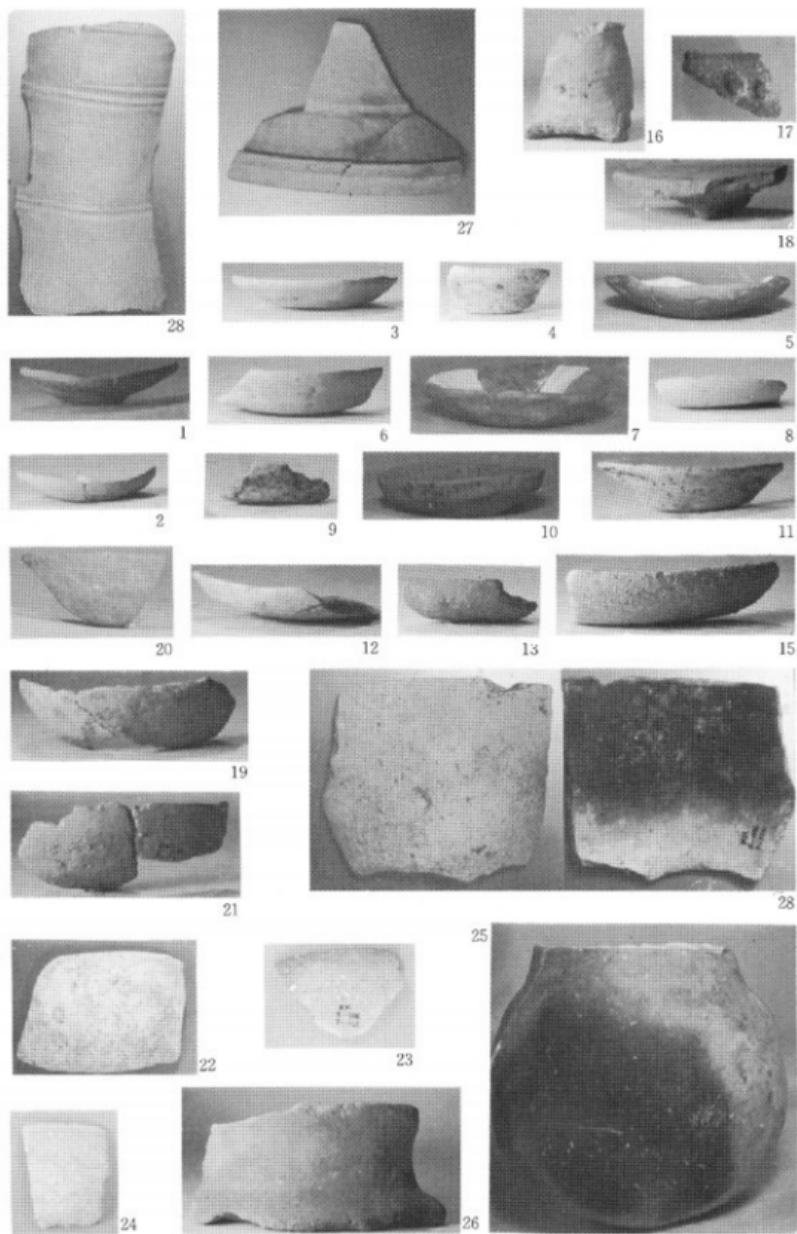
石組遺構の遺物出土状況

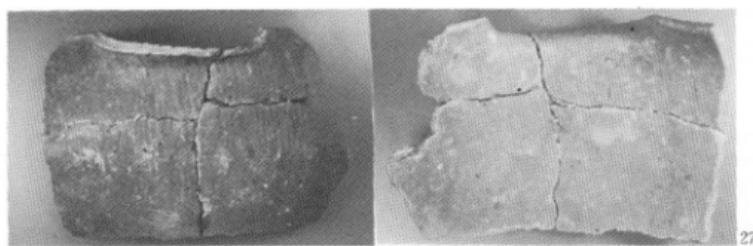


図版7

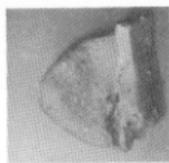
須恵器(約24のみ約1/4)







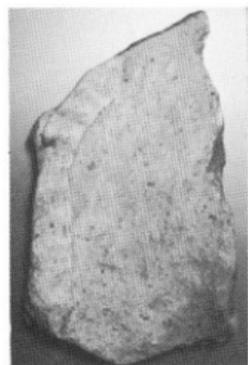
27



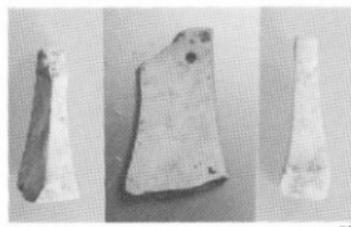
29



30



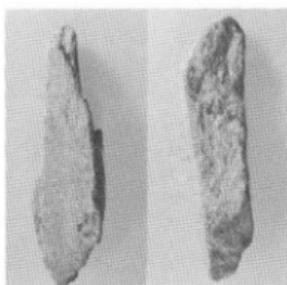
31



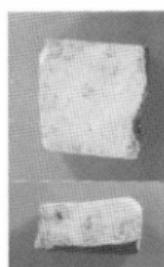
32



34



35



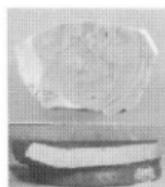
37



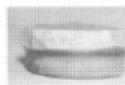
1



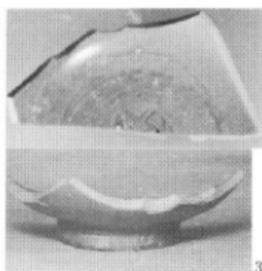
2



4



5



3



15



14



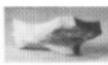
6



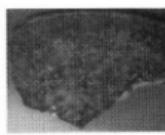
10



8



9



11



12



13



16

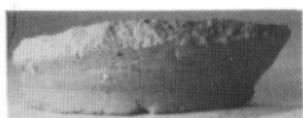


17



18

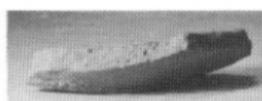




10



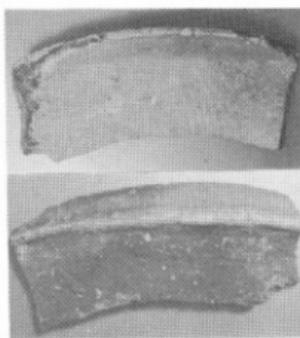
7



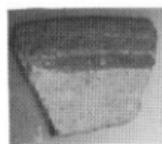
9



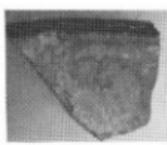
8



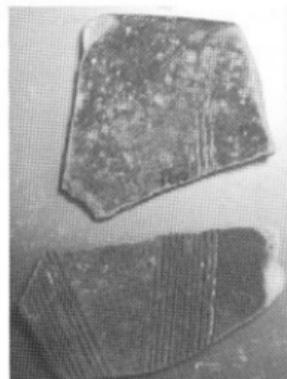
6



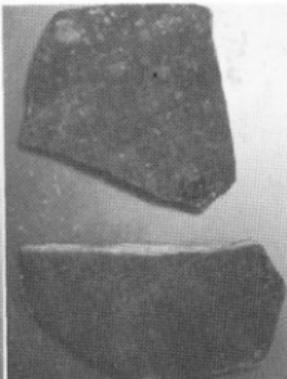
2



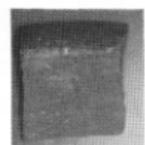
4



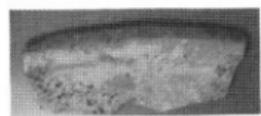
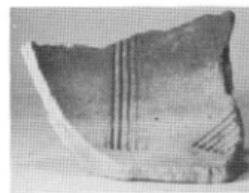
3



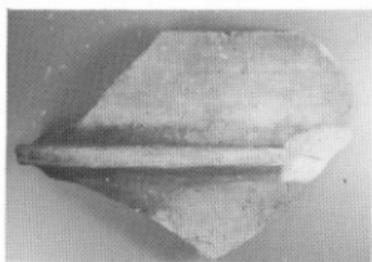
11



5



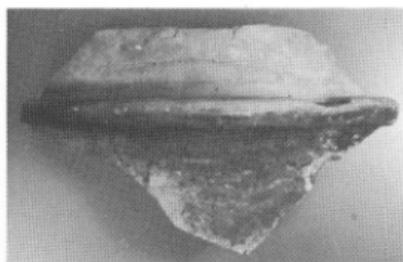
1



1



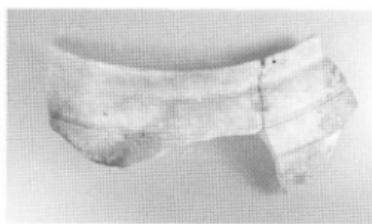
13



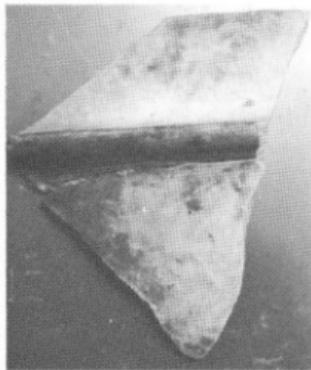
3



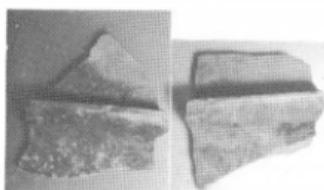
14



15



18



16



17

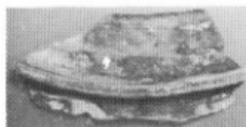


4

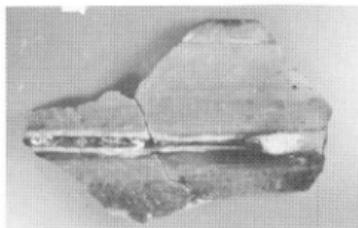


2

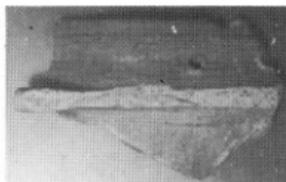
5



7



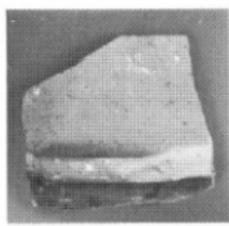
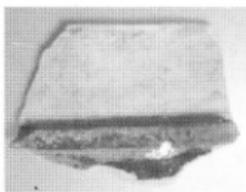
8



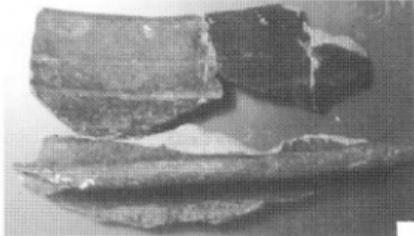
6



10



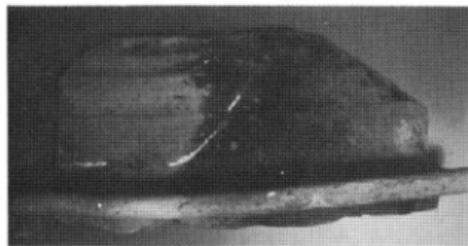
13

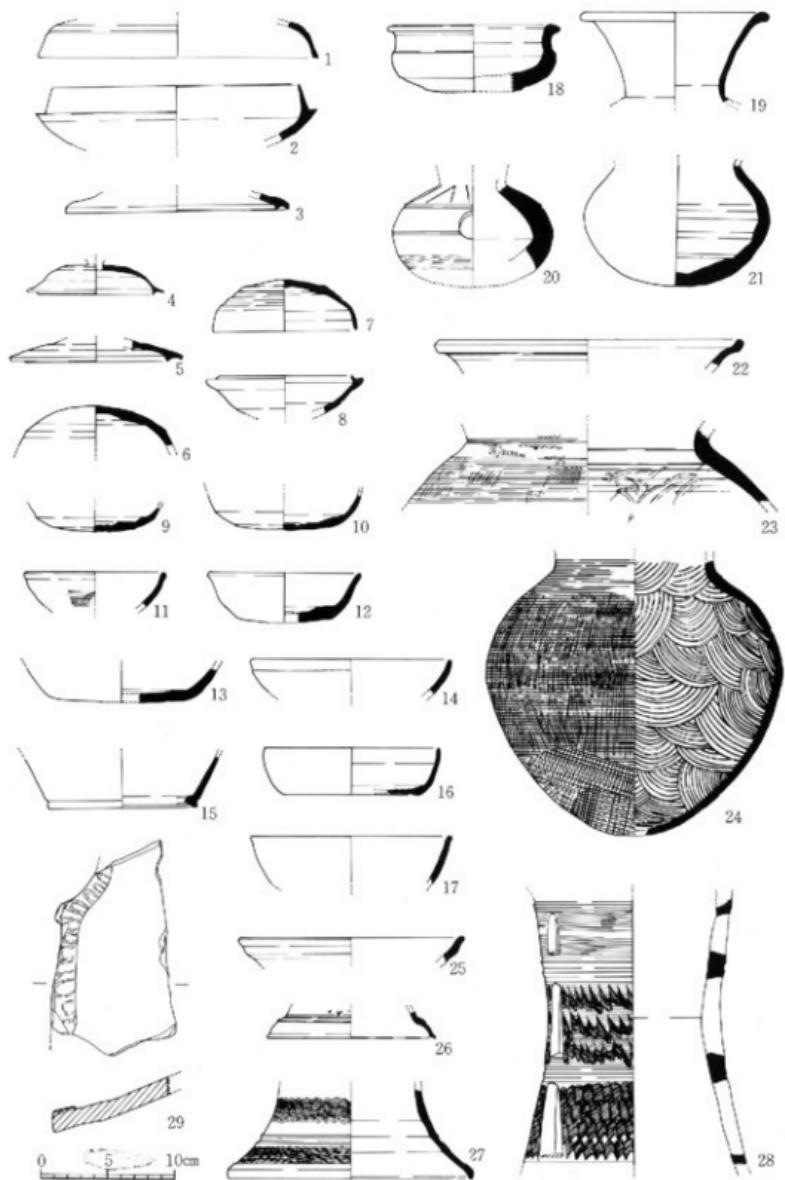


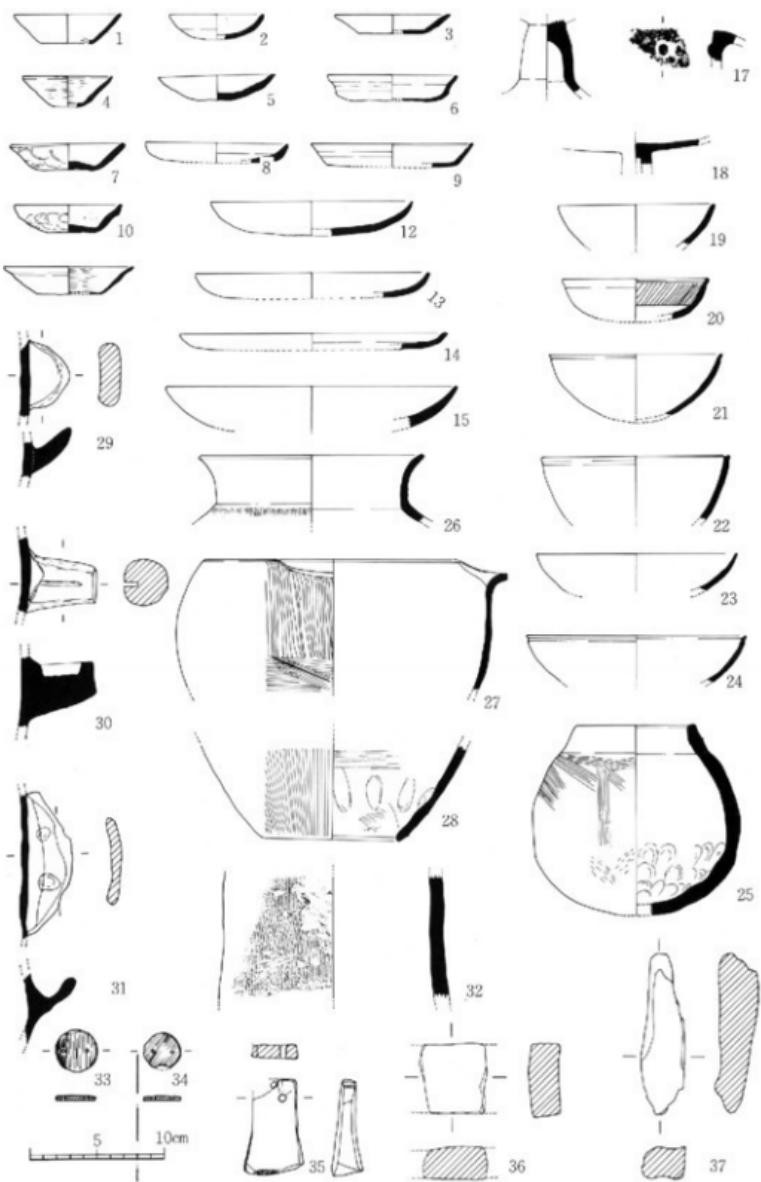
11

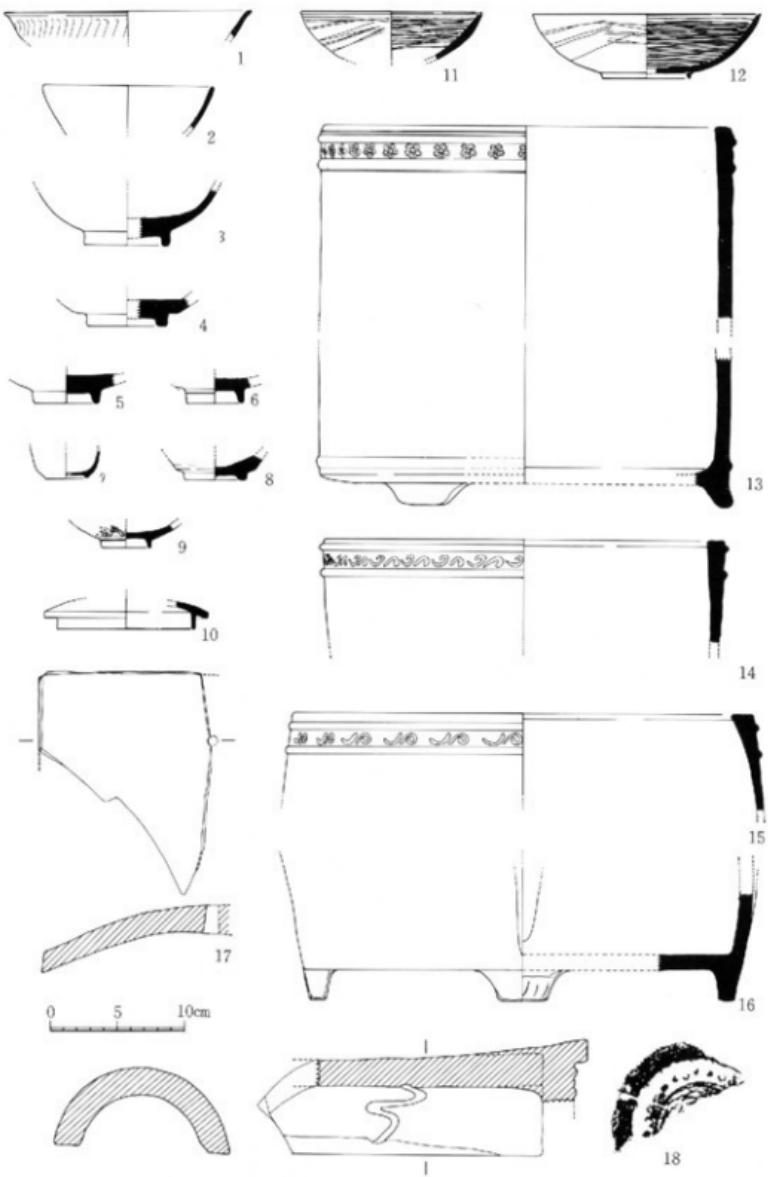


14

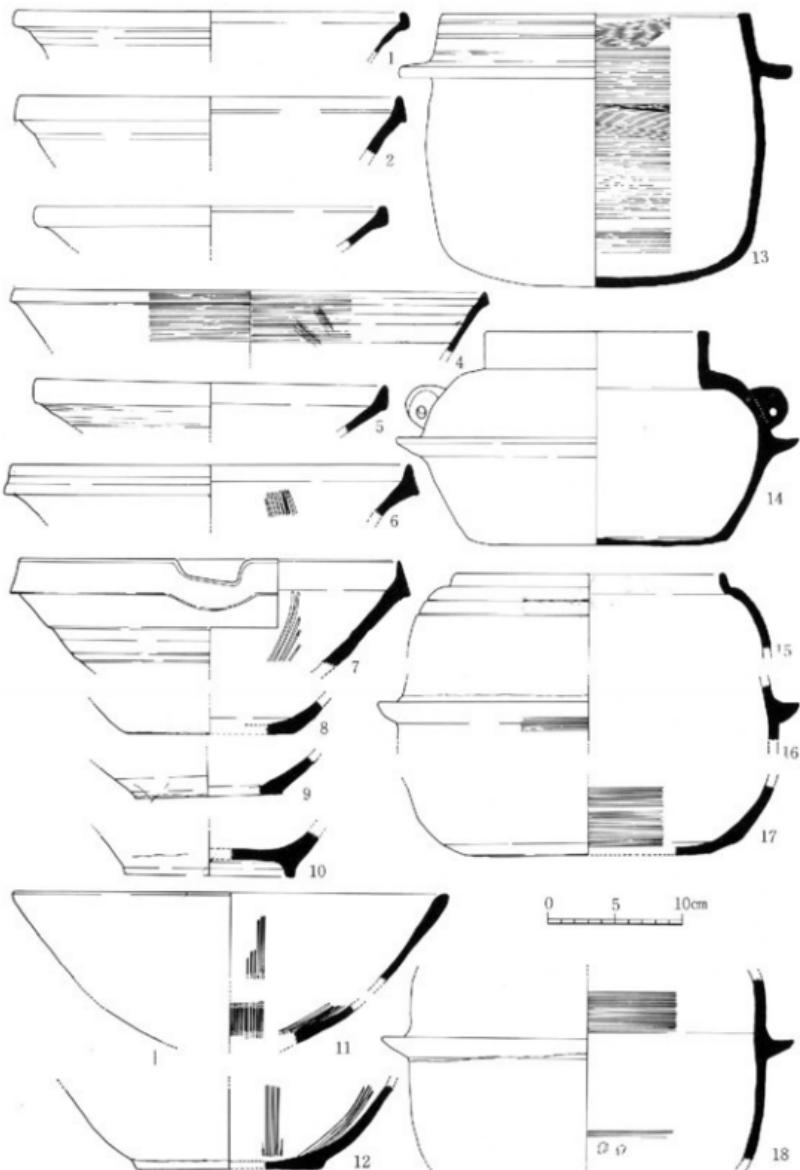


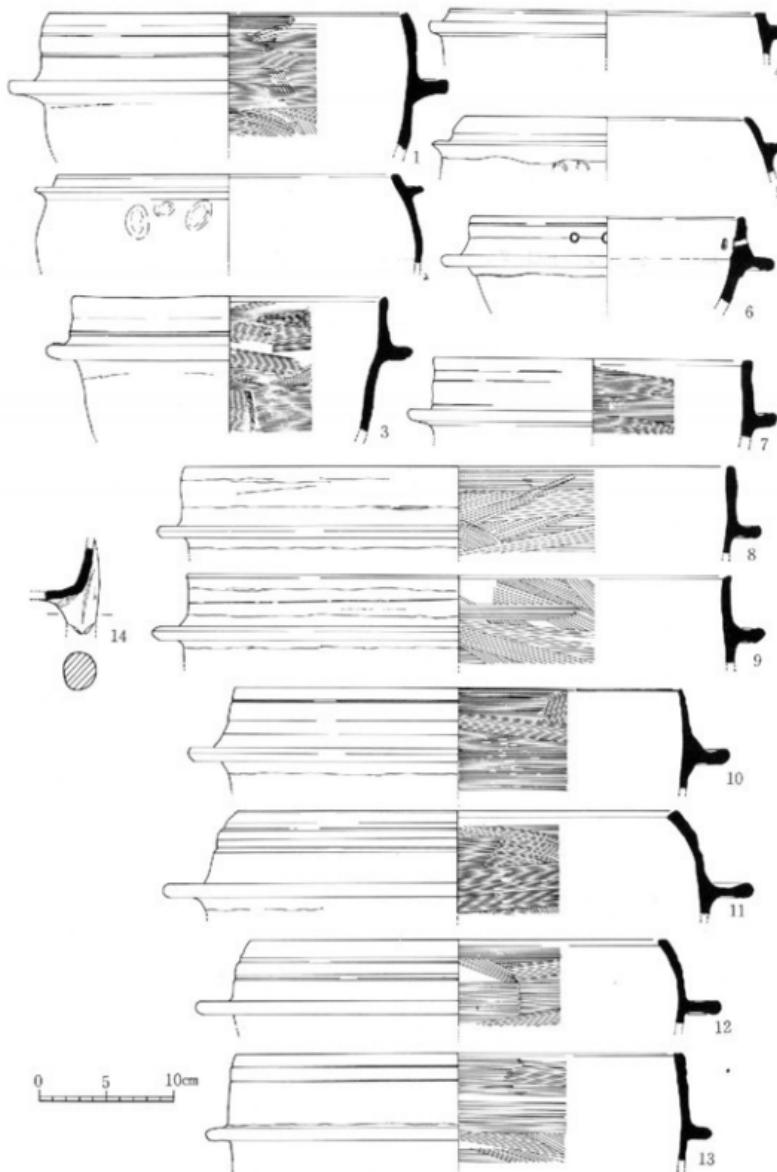






図版 17 土釜・練鉢・培養実測図





國守遺跡調査概要報告

昭和54年3月発行

編集 宇治田 和生

発行 寝屋川市教育委員会

印刷 跡 二 手 エイ

